

源氏物語

宿り木

紫式部

青空文庫

あふけなく大御おほみむすめをいにしへの人
に似よとも思ひけるかな
(晶子)

そのころ後こうきゆう宮みやで藤壺ふじつぽと言われていたのは亡き左大臣の女むすめの女御によごであつた。帝みかどがまだ東宮でいらせられた時に、最も初めに上がった人であつたから、親しみをお持ちになることは殊に深く、御愛情はお持ちになるのであつたが、その形になつて現われるようなこともなくて歳としつき月つきがたつうちに、中ちゆうぐう宮みやのほうには宮たちも多くおできになつて、それぞれごりつばにおなりあそばされたにもかかわらず、この女御は内親王をお一人お生みすることができただけであつた。自分が後宮の競争に失敗する悲しい運命を見たかわりに、この宮を長い将来にかけて唯一の慰安にするまでも完全な幸福のある方にしたいと女御は大事にかしずいていた。御容ようぼう貌ぼうもお美しかったから帝も愛しておいでになり、中宮からお生まれになつた女にょいち一みやの宮みやを、世にたぐいもないほど帝が尊重しておいでになることによつて、世間がまた格別な敬意を寄せるといふ、こうした点は別として、皇女としてはなやかな生活をしておいでになることではあまり劣ることもなくて、女御の父大臣の勢

力の大きかった名残なごりはまだ家に残り、物質的に不自由のないところから、女二の宮の侍女たちの服装をはじめとし、御殿内を季節季節にしたがって変える装飾もはなやかにして、はで派手でそして重厚な貴女らしさを失わぬ用意のあるおかしきをしていた。宮の十四におなりになる年に裳着もぎの式を行なおうとして、その春から専心したくに仕度をして、何事も並み並みに平凡にならぬようにしたいと女御は願っていた。自家の祖先から伝わった宝物類も晴れの式に役だてようと捜し出させて、非常に熱心になつていた女御が、夏ごろから物怪ものけに煩わづらい始めてまもなく死んだ。残念に思おぼしめ召よされて帝もお歎なげきになつた。優しい人であつたため、殿上役人なども御所の内が寂しくなつたように言つて惜しんだ。直接の関係のなかつた女官たちなども藤壺ふじつぼの女御を皆しのんだ。女二の宮はまして若い少女心おとめごころにお心細くも悲しくも思い沈んでおいでになるうことを、哀れに気がかりに思召す帝は、四十九日よひが過ぎるとまもなくそつと御所へお呼び寄せになつた。その藤壺へおいでになつて帝は女二の宮を慰めておいでになるのであつた。黒い喪服姿になつておいでになる宮は、いっそう可憐かれんに見え、品よさがすぐれておいでになつた。性質も聡明そうめいで、母の女御よりも静かで深みのあることは少しまさつてお知りになつて、御安心はあそばされるのであつたが、実際問題としてはこの方に確かな後援者と見るべき伯父おじはなく、わずかに女御

と腹違いの兄弟が おおくらきよう 大蔵卿、修理大夫 だゆう などであるだけであつたから、格別世間から重んぜられてもいず地位の高くもない人を背景にしていることは女の身にとって不利な場合が多いであろうことが哀れであると、帝はただ一人の親となつてこの宮のことに全責任のある気のあそばすのもお苦しかった。

お庭の菊の花がまだ終わりがたにもならず盛りなころ、空模様も時雨 しぐれ になつて寂しい日であつたが、帝はどこよりもまず藤壺へおいでになり、故人の女御のことなどをお話し出しになると、宮はおおようではあるが子供らしくはなく、難のないお答えなどされるのを帝はかわいく思召した。こうした人の価値を認めて愛する良人 おとと のないはずはない、朱雀院 すざく が姫宮を六条院へお嫁 とつ がせになつた時のことを思つてごらんになると、あの当時は飽き足らぬことである、皇女は一人でおいでになるほうが神聖でいいとも世間で言つたものであるが、源中納言のようになすぐれた子をお持ちになり、それがついているために昔と変わらぬ世の尊敬も女三の宮が受けておいでになる事実もあるではないか、そうでなく独身でおいでになれば、弱い女性の身には、自発的のことでなく過失に墮 おちてしまうことがあつて、自然人から軽侮を受ける結果になつていたかもしれないと、こんなことを帝はお思い続けになつて、ともかくも自分の位にいるうちに婿をきめておきたい、だれが好配偶者とするに

足る人物であろうとお思いになると、その女三の宮の御子の源中納言以外に適当な婿はないということへ帝のお考えは帰着した。内親王の良人おつととしてどの点でも似合わしくなくところはな、愛人を他に持つていたとしても、妻になった宮を辱はずかしめるようなことはしないはずの男である、しかしながら早くしないでは正妻というものをいつまでも持たずにいるわけではないのであるから、その前に自分の意向をかれにほめかしておきたいとこんなことを帝は時々思召した。

ある日帝は碁を打つておいでになった。暮れがたになり時雨しぐれの走るのも趣があつて、菊へ夕明りのさした色も美しいのを御覧になつて、蔵人くらうどを召して、

「今殿上の室にはだれとだれがいるか」

と、お尋ねになつた。

「中務卿親王なかつかさぎようしんのう、上野の親王こうずけしんのう、中納言源の朝臣ちゆうなごゑんなもとあそんがおられます」

「中納言の朝臣をこちらへ」

と、仰せがあつて薫かおるがまいった。實際源中納言はこうした特別な御愛あいちよう寵ちゆうによつて召される人らしく、遠くからもおう芳香をはじめとして、高い価値のある風采ふうさいを持つていた。

「今日の時雨しぐれは平生よりも明るくて、感じのよい日に思われるのだが、音楽は聞こうという気はしないし、つまらぬことにせよつれづれを慰めるのにはまずこれがいいと思うから」と帝はお言いになつて、碁盤をそばへお取り寄せになり、薫へ相手をお命じになつた。いつもこんなふうふうに親しくおそばへお呼びになる習慣から、格別何でもなく薫が思つていと、

「よい賭物かけものがあつていいはずなんだがね、少しの負けぐらいでそれは渡せない。何だと思ふ、それを」

という仰せがあつた。お心持ちを悟つたのか薫は平生よりも緊張したふうになつていた。碁の勝負で三番のうち二番を帝はお負けになつた。

「くやしいことだ。まあ今日はこの庭の菊一枝を許す」

このお言葉にお答えはせずに薫は階きざはしをおりて、美しい菊の一枝を折つて来た。そして、

世の常の垣根かきねにほふ花ならば心のままに折りて見ましを

この歌を奏したのは思召しに添つたことであつた。

霜にあへず枯れにし園の菊なれど残りの色はあせずもあるかな

と帝は仰せられた。こんなふうにおりおりおほのめかしになるのを、直接薫は何いながらも、この人の性質であるから、すぐに進んで出ようとも思わなかった。結婚をするのは自分の本意でない、今までもいろいろな縁談があつて、その人々に対して気の毒な感情もありながら、断わり続けてきたのに、今になつて妻を持つては、俗人と違うことをひようぼ標め榜うしていたものが、俗の世間へ歸つた気が自分でもして妙なものであろう。恋しくてならぬ人ででもあればともかくもであるかと否定のされる心でまた、これがきさきばら后腹の姫君であれば、そうも思わないであろうかと考える中納言はおそれおおくもあまりに思い上がったものである。

この話を左大臣は聞いて、六の君との縁組みにひようぶぎよう兵部卿の宮の進まぬふうは見せられても、薫は一度はああして断わつてみせたものの、ねんごろに頼めばしづぶにもせよ結婚をしてくれるはずであると樂觀していたのに、意外なことが起こつてきそうであると思ひ、兵部卿の宮は正面からの話にはお乗りにはならないでいて、何かと六の君に交渉を求

めて手紙をよくおよこしになるのであるから、それは真実性の少ないものであっても、妻にされれば御愛情の生じないはずもない、どんなに忠実な良人おとこになる人があっても地位の低い男にやるのは世間体も悪く、自身の心も満足のできないことであろうからと思つて、やはり兵部卿の宮を目標として進むことに定めた。女の子によい婿のあることの困難な世の中になり、帝みかどすらも御娘のために婿選びの労をおとりになるのであるから、普通の家の娘が婚期をさえ過ぎさせてしまつてはならぬなどと、帝のお考えに多少の非難めいたことも左大臣は言い、中宮へ兵部卿の宮との縁組みの実現されるように訴えることがたびたびになつたため、後の宮はお困りになり、宮へ、

「気の毒なように長くそれを望んで大臣は待ち暮らしていたのなのに、口実を作つていつまでもお応じにならないのも無情なことですよ。親王というものは後援者次第で光りもし、光らなくも見えるものなのですよ。お上の御代かみももう末になつていくと始終仰せになるのだからね。あなたはよく考えなければならぬ。普通の人の場合は定きまつた夫人を持つていてさらに結婚することは困難なのですよ。それでもあの大臣がまじめ一方でないながら二人の夫人を持ち、双方を同じように愛していくことができるといふ实例もあるではありませんか。ましてあなたはお上の思召しどおりの地位ができれば、幾人でも侍してい

いわけなのだから」

と、平生にまして長々御教訓をあそばすのを承つて、兵部卿の宮御自身も無関心では決しておいでにならない女性のことであったから、それをしいてお拒こばみになる理由もないのである。ただ権家けんかに媚君としてたいそうな扱いを受けることは、自由を失うことであろうと、その点がいやなようにお思われになるのであるが、母宮のお言葉どおりにこの大臣の反感を多く買つておくことは得策でない、今になつては抵抗力も少なくなつた。多情な御性質であるから、あの按察使あぜち大納言の家の紅梅の姫君をもまだ断念してはおいでにならず、なお花紅葉もみじにつけ好奇心の対象としてそこへも御消息はよこしておいでになるのである。

その年は事なしに終わった。女二の宮の喪期も終わったのであるから、帝はもうおはばかりあそばすことはなくなつた。

「御懇望にさえなればすぐにお許しになりたい思召しとうかがわれます」

こんなふうには薫へ告げに来る人々もあるためあまりに知らず顔に冷淡なものも無礼なことであると、しいて心を引き立てて、女二の宮付きの人を通して、求婚者としての手紙をおりおり送ることもするようになったが、取り合はぬ態度などはもとよりお示しになるはず

もない。帝は何月ごろと結婚の期を思召すというようなことも人から聞き、自身でも御許容あそばすことはうかがわれるのであったが、心の中では今も死んだ宇治の人ばかりが恋しく思われて、この悲しみを忘れ尽くせる日があるうとは思われぬために、こうまで心のつながれる因縁のあつたあの人と、ついに夫婦とはならず終つたのはどうしたことなのであらうとそれを怪しがっていた。身分がどれほど低くとも、あの人に少しでも似たところのある人であれば自分は妻として愛するであらう、はんごんこう反魂香の煙が描いたという影像だけでも見る方法はないかとこんなことばかりが薰には思われて、にょに女二の宮との結婚の成立を待つ心もないのである。

左大臣のほうでは六の君の結婚の用意にかかつて、八月ごろにと宮へその期を申し上げた。これを二条の院の中の君も聞いた。やはりそうであつた、自分などという何のよい背景も持たない女には必ず幸福の破綻はたんがあるであらうと思いつつ、今日まで来たのである。多情な御性質とはかねて聞いていて、頼みにならぬ方とは思いつつも、いっしょにいては恨めしく思うようなことも宮はしてお見せにならず、深い愛の変わる世もないような約束ばかりをあそばした。それがにわかには権家の娘の良人おととになつておしまいになつたなら、どうして静めえられる自分の心であらう、並み並みの身分の男のように、まったく自分が

ら離れておしまいになることはあるまいが、どんなに悩ましい思いを多くせねばならぬことであろう、自分はどうしても薄命な生まれなのであるから、しまいにはまた宇治の山里へ帰ることになるのであらうと考えられるにつけても、出て来たままになるよりも再び帰ることは宇治の里人にも譏そしらわしいことであるに違いない、返す返すも父宮の御遺言にそむいて結婚をし、山荘を出て来た自分の誤りが恥ずかしい、しかさせた運命が恨めしいと中の君は思うのであつた。姉君はおおようで、柔らかいふうなところばかりが外に見えたが、精神は確しかとしておいでになつた。中納言が今も忘れがたいように姉君の死を悲しみ続けているが、もし生きていたらば、今の自分のような物思いをすることがあつたかもしれぬ、そうした未来をよく察して、あの人の妻にならうとされなかつた、いろいろに身をかわずようにして中納言の恋からのがれ続けていて、しまいには尼にならうとしたではないか、命が助かつても必ずぶつてし仏弟子になつていたに違いない、今思つてみればきわめて深い思慮のある方であつた、父宮も姉君も自分をこの上もない、軽率な女であるとあの世から見ておいでになるであらうと、恥ずかしく悲しく思うのであつたが、何も言うまい、言つても効かのないことを言つて嫉妬しつとがましい心を見られる必要もないと中の君は思い返して、宮の新しい御縁組みのことは耳にはいつてこぬふうで過ごしていた。

宮はこの話のきまつてからは、平生よりもまた多く愛情をお示しになり、なつかしいふうに将来のことをどの日もどの日もお話しになり、この世だけでない永久の夫婦の愛をお約しになるのであつた。中の君はこの五月ごろから普通でない身体からだの悩ましさを覚えていた。非常に苦しがるようなことはないが、食欲が減退して、毎日横にばかりなつていた。妊婦というものを近く見る御経験のなかつた宮は、ただ暑いころであるからこんなふうになつているのであらうと思召したが、さすがに不審に思召すこともあつて、

「ひよつとすればあなたに子ができるようになったのではないだらうか。妊婦というものはそんなふう^にに苦しがるものだそうだから」

ともお言いになつたが、中の君は恥ずかしくて、そうでないふうばかりを作っているのを、進み出て申し上げる人もないため、確かには宮もおわかりにならなかつた。

八月になると、左大臣の姫君の所へ宮がはじめておいでになるのは幾日ということが外から中の君へ聞こえてきた。宮は隔て心をお持ちになるのではないが、お言いだしになることは気の毒でかわいそうに思われておできにならないのを、夫人はそれをさえ恨めしく思つていた。隠れて行なわれることでなく、世間じゆうで知つてい^ることをいつごろとだけもお言いにならぬのであるから、中の君の恨めしくなるのは道理である。この夫人が二

条の院へ来てからは、特別な御用事などがないかぎり、御所へお行きになつても、ほかへおまわりになり、泊まつてお帰りになるようなことを宮はあそばさないものであつて、情人の所をお訪ねたずになつて孤閨こけいを夫人にお守らせになることもなかつたのが、にわか一方で結婚生活をするようになればどんな気がするであろうと、お心苦しくお思われになるため、今から習慣を少しつけさせようとされて、時々御所で宿直とくのいなどをあそばされたりするのを、夫人にはそれも皆恨めしいほうにばかり解釈されたに違いない。中納言もかわいそうなことでであると、この問題における中の君を思つていて、宮は浮気うわきな御性質なのであるから、愛してはおいでになつても、はなやかな新しい夫人のほうへお心が多く引かれることにならう、婚家もまた勢いをたのんでいる所であるから、間断なしに婿君をお引き留めしようとする事になれば、今までとは違つた変わり方に中の君は待ち続ける夜を重ねることになつては哀れであるなどと、こんなことが思われるにつけても、なんたることであろう、不都合なのは自分である、何のためにあの人を宮へお譲りしたのであらう、死んだ姫君に恋を覚えてからは、宗教的に澄み切つた心も不透明なものになり、盲目的になり、あらゆる情熱を集めてあの人を思いながらも、同意を得ずに男性の力で勝つことは本意でないとはばかつて、ただ少しでもあの人に愛されて相思う恋の成立をば夢見て未来の楽し

い空想ばかりを自分はしていたのに、あの人は恋を感じぬふうを見せ続け、さすがに冷淡には自分を見ていない証^{あかし}として、同じ身だと思えと言つて中の君との結婚を勧めたのであつたが、自分にとつてはただあの人の態度がくやく恨めしかつたところから、あの人の計画をこわして宮と中の君との結婚を行なわせてしまえばなどと、無理な道をとつて狂氣じみた媒介者になつた時のことを思い出すと、不都合なのは自分であつたと返す返す薫は悔やまれた。宮もどんな御事情になつていても、あの時のことをお思い出しになれば自分に対してでも少し御遠慮があつていいはずであると思うのであつたが、また宮はそんな方ではない、あれ以来あの時のことを話題にされるようなことはないではないか、多情な人というものは、異性にだけでなく、友情においても誠意の少ないものらしいなどとお憎みする心さえ薫に起こつた。自身^きがあまりに純一な心から他人をもどかしく思うのであるらしい。あの人を死なせてからの自分の心は帝の御娘を賜わるといふことになつたのもうらしいこととは思われない、中の君を妻に得られていたならと思ふ心が月日にそえ勝つてくるのも、ただあの人の妹であるということが原因^{もと}になつてその思いが捨てられないのである、姉^{きょうだい}妹^いといううちにもあの二人の女性の持ち合つていた愛は限度もないものであつて、臨終に近づいたころにも、残しておく妹を自分と同じものに思えと言ひ、ほかに

心残りはないが、自分がこうなれと願ったあの縁組みをはずされたこと、他へ譲られたことで安心ができず、その成り行きを見るためにだけ生きていたい気がする。あの人が言ったのであったから、あの世で宮の新しい御結婚のことなどを知っては、いつそう自分を恨めしく思うことであろうなどと、切実に寂しいひとり寝ひとをする夜ごとに薫かおるは、風の音にも目のさめてこんなことが思われ、過去と未来を思い、この世を味気なくばかり思った。かりそめの情で愛人とし、女房として家に置いてある人たちの中には、自然と真実の愛も生じてきそうな人もあるはずであるが、事実としてはそんな人もない。いつも独身者の心持ちよりほかを知らなかった。そうした女房勤めしている中には、宇治の姫君たちにも劣らぬ階級の人も、時世の移りで不幸な身の上になり、心細く暮らしていたりしたのを、同情して家へ呼んだというような種類の女房が少なくはないのであるが、異性ととの交渉はそれほどにとどめて、出家の目的の達せられる時に、取り立ててこの人が心にかかると思われるような愛着の覚えられる人は作らないでおこうと深く思っていた自分であったにもかかわらず、今では死んだ恋人のゆかりの中の君に多く心の惹ひかれていた自分が認められる、人並みな恋でない恋に苦しむとは自分のことながらも残念であるなどという思いにとらわれていて、そのまま眠りえずに明かしてしまった暁、立つ霧を隔てて草花の姿のいろいろと

美しく見える中にはかない朝顔の混じっているのが特に目にとまる気がした。人生の頼みなさにたとえられた花であるから身に沁しんで薫は見られたのであろう。宵よいのまま揚げ戸も上げたままにして縁の近い所でうたた寝のようにして横たわり朝になったのであったから、この花の咲いていくところもただ一人薫がながめていたのであった。侍を呼んで、

「北の院へ伺おうと思うから、簡単な車を出させるように」

と命じてから装束を改めた。

出かけるために庭へおりて、秋の花の中に混じって立った薫は、わざわざ艶えんなふうを見せようとするのではないが、不思議なまで艶で、高貴な品が備わり、氣どった風流男などとは比べられぬ美しさがあった。朝顔を手もとへ引き寄せるとはなはだしく露がこぼれた。

「今朝けさのまの色にや愛めでん置く露の消えぬにかかる花と見る見る

はかない」

などと独ひとりごと言ことをしながら薫は折って手にした。女郎花おみなえしには触れないで。

明け放れるのにしたがって霧の濃くなった空の艶な気のする下を二条の院へ向かった薫

は、宮のお留守るすの日はだれもゆるりと寝ていることであろう、格子や妻戸をたたいて案内を乞うこのも物馴なれぬ男に思われるであろう、あまり早朝に来すぎたと思ひながら薫は従者を呼んで、中門のあいた口から中をのぞかせてみると、

「お格子が皆上がっているようでございます。そして女房たちの何かいたしますけはい気配けいがいたします」

と言う。下車して霧の中を美しく薫の歩いてはいつて来るのを女房たちは知り、宮が微妙しのび場所からお帰りになったのかと思っていたが、露に湿った空気が薫の持つ特殊しゆじゆつのおいを運んできたためにだれであるかを悟り、

「やはり特別な方ですね。ただあまりに澄んだふうでいらっしやるのが物足らないだけね」
とも若い女房はささやいていた。

驚いたふうも現わさず、感じのよいほどにその人たちが衣擦きぬずれの音を立てて褥しとねを出したりする様子も品よく思われた。

「ここにすわつてもよいとお許しくださいます点は名譽に思われますが、しかしこうした御簾みすの前の遠々しいおもてなしを受けることで悲観されて、たびたびは伺えないのです」

と薫が言うのと、

「それではどういたせばお気が済むのでございますか」

女房はこう答えた。

「北側のお座敷というような、隠れた室が私などという古なじみのゆるりとさせていただくによい所です。しかしそれも奥様の思召しによることですから、不平は申し上げません」と言い、薫は縁側から一段高い長押しながし上半身を寄せかけるようにして坐ざしているのを見て、例の女房たちが、

「ほんの少しあちらへおいであそばせ」

などと言い、夫人を促していた。

もともと様子のおとなしい、男の荒さなどは持たぬ薫であるが、いよいよしんみり静かなふうになっていたから、中の君はこの人と対談することの恥はづかしく思われたことも、時がもはや薄らがせてなしやすく思うようになっていた。

「お身体からだが悪いと伺っていますのはどんなふうの御病気ですか」

などと薫は聞くが、夫人からはかばかしい返辞を得ることはできない。平生よりもめいっつたふうの見えるのに理由のあることを知っている薫は、それを哀れに見て、こまやかに世の中に処していく心の覚悟というようなものを、兄弟などがあって、教えもし慰めもす

るふうに言うのであった。声なども特によく似たものともその当時は思わなかったのであるが、怪しいほど薫には昔の人のとおりに聞こえる中の君の声であった。人目に見苦しくなければ、御簾も引き上げて差し向かいになつて話したい、病氣をしているという顔が見たい心のいつぱいになるのにも、人間は生きている間次から次へ物思いの続くものであるということとはこれである、自分はまたこうした心の悶えもたをしていかねばならぬ身になつたと薫はみずから悟つた。

「はなやかなこの世の存在ではなくとも、心に物思いをして歎きにわが身をもてあますよ
うな人にはならず、一生を過ごしたいと願つていた私ですが、自身の心から悲しみも見る
ことになり、愚かしい後悔もこもごも覚えることになりましたのは残念です。官位の昇
進が思うようにならぬという人を最も大きな歎きとしていますが、それよりも私の
する歎きのほうが少し罪の深さはまさるだろうと思われます」

などと言いながら、薫は持つて来た花を扇に載せて見ていたが、そのうちに白い朝顔は
赤みを帯びてきて、それがまた美しい色に見られるために、御簾の中へ静かにそれを差し
入れて、

よそへてぞ見るべかりける白露の契りかおきし朝顔の花

と言った。わざとらしくてこの人が携えて来たのでもないのに、よく露も落とさずにもたらされたものであると思つて、中の君がながめ入っているうちに見る見る萎しぼんでいく。

「消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされる

『何にかかれる』（露のいのちぞ）」

と低い声で言い、それに続けては何も言わず、遠慮深く口をつぐんでしまう中の君のこんなところも故人によく似ていると思うと、薫はまずそれが悲しかった。

「秋はまたいつそう私を憂鬱ゆううつにします。慰むかと思ひまして先日も宇治へ行つて来たのです。庭も籬まがきも実際荒れていましたから、（里は荒れて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋ののらなる）堪えがたい気持ちを感じました。私の父の院がお亡かくれになったあとで、晩年出家をされ籠こもつておいでになった嵯峨さかの院もまた六条院ものぞいて見る者は皆おさえきれず泣かされたものです。木や草の色からも、水の流れからも悲しみは誘われて、皆涙にく

れて帰るのが常でした。院の御身辺におられたのは平凡な素質の人もなく皆りつぱな方がたでしたがそれぞれ別な所へ別れて行き、世の中とは隔離した生活を志されたものです、またそうたいした身の上でない女房らは悲しみにおぼれきつて、もうどうなつてもいいというように山の中へはいったり、つまらぬ田舎いなかの人になつたりちりぢりに皆なつてしまいました。そうして故人の家を事実上荒らし果てたあとで、左大臣がまた来て住まれるようになり、宮がたもそれぞれ別れて六条院をお使いになることになつて、ただ今ではまた昔の六条院が再現された形になりました。あれほど大きな悲しみに逢あつたあとでも年月が経ふればあきらめというものが出てくるものであらう、悲しみにも時が限りを示すものであると私はその時見ました。こう私は言つていまして昔の悲しみは少年時代のことでしたから、悲痛としていても悲痛がそれほど身にしまなかつたのかもかもしれません。近く見ました悲しみの夢は、まだそれからさめることもどうすることもできません。どちらも死別によつての感傷には違いありませんが、親の死よりも罪深い恋人関係の人の死のほうに苦痛を多く覚えていきますのさえみずから情けないことだと思つています」

こう言つて泣く薫に、にじみ出すほどな情の深さが見えた。大姫君を知らず、愛していなかつた人でも、この薫の悲しみにくれた様子を見ては涙のわかないはずもないと思われ

るのに、まして中の君自身もこのごろの苦い物思いに心細くなっていて、今まで以上に姉君のことが恋しく思い出されているのであったから、薫の憂いを見てはいっそうその思いがつのつて、ものを言われぬほどになり、泣くのをおさえきれずになっているのを薫はまた知って、双方で哀れに思い合った。

「世の憂うれきよりは（山里はものの寂しきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり）と昔の人の言いましたようにも私はまだ比べて考えることもなくて京に来て住んでおりましたが、このごろになりましたやはり山里へはいつて静かな生活をしたいということがしきりに思われるのでございます。でも思ってもすぐに実行のできませんことで弁の尼をうらやましくばかり思っております。今月の二十幾日はあすこの山の御寺みでらの鐘を聞いて黙禱もくとうをしたい気がしてならないのですが、あなたの御好意でそつと山荘へ私の行けるようにしていただけませんでしょうかと、この御相談を申し上げたく私は思っております」

と中の君は言った。

「宇治をどんなに恋しくお思いになりましたでもそれは無理でしょう。あの道を辛抱しんぼうして簡単に御婦人が行けるものですか。男でさえ往来するのが恐ろしい道ですからね、私なども思いながらあちらへまいることが延び延びになりがちなのです。宮様の御忌日のことは

あの阿闍梨あじやりに万事皆頼んできました。山莊のほうは私の希望を申せば仏様だけのものにしていただきたいのですよ。時々行つては痛い悲しみに襲われる所ですから、罪障消滅のできますような寺にしたいと私は思うのですが、あなたはどうお考えになりますか。あなたの御意見によつてどうとも決めたいと思うのですから、ああしたいとか、そうしてもいいとか腹藏なくおっしゃってください。何事にもあなたのお心持ちをそのまま行なわせていただければそれで私は満足なのです」

と言ひ、まじめな話を薰かおるはした。経巻や仏像の供養などもこの人はまた宇治で行なおうとしてゐるらしい。中の君が父宮の御忌日に託して宇治へ行き、そのまま引きこもろうとするのに賛同を求めるふうであるのを知つて、

「宇治へ引きこもろうというようなお考えをお出しになつてはいけませんよ。どんなことがあつても寛大な心になつて見ていらつしやい」

などとも忠告した。

日が高く上つてきて伺候者が集まつて来た様子であつたから、あまり長居をするのも秘密なことのありそうに誤解を受けることであろうから帰ろうと薰はして、

「どこへまいつても御簾みすの外へお置かれするような経験を持たないものですから恥ずかし

くなります。またそのうち伺いましょう」

こう挨拶あいさつをして行つたが、宮は御自身の留守の時を選んでなぜ来たのであらうとお疑いをお持ちになるような方であるからと薫は思い、それを避けるために侍所さむらいどころの長になつている右京大夫うきょうだゆうを呼んで、

「昨夜宮様が御所からお出になつたと聞いて伺つたのですが、まだ御帰邸になつておられないので失望をしました。御所へまいつてお目にかかつたらいいでしょうか」

と言つた。

「今日はお帰りでございましょう」

「ではまた夕方にでも」

薫はそして二条の院を出た。中の君の物越しの気配けはいに触れるごとに、なぜ大姫君の望んだことに自分はそむいて、思慮の足らぬ処置をとつたのであらうと後悔ばかりの続いて起こるのを、なぜ自分はこうまで一徹な心であらうと薫は反省もされた。この人はまだ精進を続けて仏勤めばかりを家ではしているのである。母宮はまだ若々しくたよりない御性質ではあるが、薫のこうした生活を危険なことと御覧になつて、

「私はもういつまでも生きてはいないのでしようから、私のいる間は幸福なふうでいてく

ださい。あなたが仏道へはいろいろとしても、私自身尼になっ
ていながらとめることはできないのだけれど、この世に生きて
いる間の私はそれを寂しくも悲しくも思うことだろうか
ら、結局罪を作ることになるだろうからね」

とお言いになるのが、薫にはもつたいなくもお気の毒にも
思われて、母宮のおいでになる所では物思いのないふうを装
っていた。

左大臣家では東の御殿をみかくようにもして設備しつらい婿君を
迎えるのに遺憾なくとのえて兵部卿ひょうぶきょうの宮をお待
ちしているのであったが、十六夜いざよいの月がだいぶ高くな
るまでおいでならぬため、非常にお気が進まないらしいので
あるから将来もどうなることかと不安を覚えながらも使
いを出してみると、夕方に御所をお出になって二条の院にお
いでになるというしらせがもたらされた。愛する人を持つて
おいでになるのであるからと不快に大臣は思ったが、今夜に
済まさねば世間体も悪いと思ひ、息子むすこの頭中將とうのを使
いとして次の歌をお贈りするのであった。

大空の月だに宿るわが宿に待つ宵よひ過ぎて見えぬ君かな

宮はこの日に新婚する自分を目前に見せたくない、あまりにそれは残酷であると思召おほしめして御所においでになったのであるが、手紙を中の君へおやりになった、その返事がどんなものであつたのか、宮が深くお動かされになつて、そつとまた二条の院へおはいりになつたのである。

可憐かれんな夫人を見て出かけるお気持ちにはならず、氣の毒に思召す心からいろいろに将来の長い誓いをさせるのであるが、中の君の慰まない様子をお知りになり、誘うていつしよに月をながめておいでになる時に使いの頭中将は二条の院へ着いたのである。夫人は今までも煩悶はんもんは多くしてきたが、外へは出して見せまいとおさえきつてきていて、素知らぬふうを作つていたのであるから、今夜に何事があるかも聞かずおおようにしてるのを哀れにお思ひになる宮であつた。頭中将の来たのをお聞きになると、さすがに宮はあちらの人もかわいそうにお思われになり、お出かけにならうとして、

「すぐ歸つて来ます。一人で月を見てはいけませんよ。氣の張り切つていない時などには危険で心配だから」

とお言ひになり、きまりの悪いお気持ちで隠れた廊下から寢殿へお行きになつた。お後ろ姿を見送りながら中の君は枕まくらも浮き上がるほどな涙の流れるのをみずから恥じた。恨め

しい宮に愛情を覚えるのは恥ずかしいことであるとしていたのに、いつかそのほうへ自分は引かれていって、恨みの起こるのもそれがさせるのであると悟ったのである。幼い日から母のない娘で、この世をお愛しにもならぬ父宮を唯一の頼みにしてあの寂しい宇治の山荘に長くいたのであるが、いつとなくそれにも馴れ、徒然さは覚えながらも、今ほど身にしむ悲しいものとは山荘時代の自分は世の中を知らなかった。父宮と姉君に死に別れたあとでは片時も生きていられないように故人を恋しく悲しく思っていたが、命は失われずあつて、軽蔑した人たちが思ったよりも幸福そうな日が長く続くものとは思われなかつたが、自分に対する宮の態度に御誠実さも見え、正妻としてお扱いになるのによつて、ようやく物思いも薄らいできていたのであるが、今度の新しい御結婚の噂が事実になつてくるにしたがい、過去にも知らなんだ苦しみに身を浸すこととなつた、もう宮と自分との間はこれで終わつたと思われる、人の死んだ場合とは違つて、どんなに新夫人をお愛しになるにもせよ、時々はおいでになることがあると思つてよいはずであるが、今夜こうして寂しい自分を置いてお行きになるのを見た刹那から、過去も未来も真暗なような気がして心細く、何を思うこともできない、自分ながらあまりに狭量であるのが情けない、生きていればまた悲観しているようなことばかりでもあるまいなどと、みずから慰めようと中

の君はするのであるが、姨捨山おほすてやまの月（わが心慰めかねつ更科さらしなや姨捨山に照る月を見て）ばかりが澄み昇のぼつて夜がふけるにしたがい煩悶はんもんは加わっていった。松風の音も荒かった山おろしに比べれば穏やかでよい住居すまいとしてゐるようには今夜は思われずに、山の椎しいの葉の音に劣つたように中の君は思うのであった。

山里の松の蔭かげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

過去の悲しい夢は忘れたのであろうか。

老いた女房などが、

「もうおはいりあそばせ、月を長く見ますことはよくないことだと申しますのに。それにこの節ではちよつとしましたお菓子すら召し上がらないのですから、こんなことでどうおなりになりますでしょう。よくございません。以前の悲しいことも私どもにお思い出させになりますのは困ります。おはいりあそばせ」

こんなことを言う。若い女房らは情けない世の中であると歎息をして、

「宮様の新しい御結婚のこと、ほんとうにいやですね。けれどこの奥様をお捨てあそばす

ことにはならないでしょう。どんな新しい奥様をお持ちになっても、初めに深くお愛しになつた方に対しては情けの残るものだと思いますからね」

などと言っているのも中の君の耳にはいつてくる。見苦しいことである、もうどんなことになつても何とも自分からは言うまい、知らぬふうでいようとこの人が思っているといふのは、人には批評をさせまい、自身一人で宮をお恨みしようと思うのであるかもしれない。

「そうじゃありませんか、宮様に比べてあの中納言様の情のお深さ」

とも老いた女は言い、

「あの方の奥様になつておいでにならないで、こちらの奥様におなりになつたというのも不可解な運命というものですね」

こんなこともささやき合つていたのである。

宮は中の君を心苦しく思おぼしめ召しながらも、新しい人に興味を次々お持ちになる御性質なのであるから、先方に喜ばれるほどに美しく装つていきたいお心から、薰くんこう香を多くたきしめてお出かけになつた姿は、寸分の隙すきもないお若い貴人でおありになつた。六条院の東御殿もまた華麗であつた。小柄な華きやしや奢な姫君というのではなく、よいほどな体格をした

新婦であつたから、どんな人であろう、たいそうに美人がった柔らかかみのない、自尊心の強いような女ではなからうか、そんな妻であつたならいやになるであろうと、こんなことを最初はお思ひになつたのであるが、そうではないらしくお感じになつたのか愛をお持ちになることができた。秋の長夜ではあつたが、おそくおいでになつたせいでまもなく明けていった。

兵部卿の宮はお帰りになつてもすぐに西の対へおいでになれなかつた。しばらく御自身のお居間でお寝やすみになつてから起きて新夫人の文ふみをお書きになつた。あの御様子ではお氣に入らないのでもなかつたらしいなどと女房たちは陰かげぐち口くちをしていた。

「対の奥様がお氣の毒ですね。どんなに大きな愛を宮様が持つておいでになつても、自然けお氣お押おされることも起こるでしょうからね」

ただの主従でない関係も宮との間に持つている人が多かつたから、ここでも嫉妬しつとの氣はかもされているのである。あちらからの返事をここで見てからと宮は思つておいでになつたのであるが、別れて明かしたのもただの夜でないものであるから、どんなに寂しく思つてゐることであろうと、中の君がお氣にかかつてそのまま西の対へおいでになつた。まだ夜のまま繕ひわれていない夫人の顔が非常に美しく心を惹ひくところがあつて、宮のおいでにな

つたことを知りつつ寝たままでいるのも、反感をお招きすることであるからと思ひ、少し起き上がっている顔の赤みのさした色などが、今朝は特別にまたきれいに見えるのであつた。何のわけもなく宮は涙ぐんでおしまいになつて、しばらく見守つておいでになるのを、中の君は恥ずかしく思つて顔を伏せた。そうされてまた、髪の掛かりよう、はえようなどにたぐいもない美を宮はお感じになつた。きまりの悪さに愛の言葉などはちよつと口へ出ず、なにげないふうに分らして、

「どうしてこんなに苦しそうにばかり見えるのだろう。暑さのせいだとあなたは言つていたからやつと涼しくなつて、もういいころだと思つているのに、晴れ晴れしくないのはいけないことです。いろいろな祈禱きとうなどをさせていても効験しるしの見えない気がする。それでも祈禱はもう少し延ばすほうがいいね。効験をよく見せる僧がほしいものだ、何々僧都そうずを夜居いにしてあなたにつけておくのだつた」

というようなまじめらしい話をされるのにもお口じようずなのがつましく思われる中の君でもあつたが、何もお返辞をしないのは平生に違つたことと思われるであろうとはばかつて、

「私は昔もこんな時には普通の人のような祈禱も何もしていただかないで自然になおつた

のですから」

と言った。

「それでよくなおっているのですか」

と宮はお笑いになって、なつかしい愛嬌あいぎょうの備わった点はこれに比べうる人はないであらうとお思いになったのであるが、お心の一方では新婦をなおよく知りたいとあせるところのおありになるのは、並み並みならずあちらにも愛着を覚えておいでになるのである。しかしながらこの人と今いっしょにおいでになつては、昨日きのうの愛が減じたとは少しもお感じにならぬのか、未来の世界までもお言いだしになつて、変わらない誓いをお立てになるのを聞いていて、中の君は、

「仏の教えのようにこの世は短いものに違いありません。しかもその終わりを待ちますうちに、あなたが恨めしいことをなさいますのを見なければなりませんから、それよりも未来の世のお約束のほうをお信じしていいかもしれないと思うことで、まだ懲りずにあなたのお言葉に信頼しようと思いません」

と言い、もう忍びきれなかったのか今日は泣いた。今日までもこんなふうに思っているとはお見せすまいとして自身で紛らわしておさえてきた感情だったのであるが、いろいろ

と胸の中に重なってきて隠されぬことになり、こぼれ始めた涙はとめようもなく多く流れるのを、恥ずかしく苦しく思つて、顔をすっかり向こうに向けているのを、しいて宮はこちらへお引き向けになつて、

「二人がいつしよに暮らして、同じように愛しているのだと思つていたのに、あなたのほうにはまだ隔てがあつたのですね。それでなければ昨夜のうちに心が変わったのですか」
こうお言いになり宮は御自身の袖で夫人の涙をおぬぐいになると、

「夜の間の心変わりということからあなたのお気持ちがよく察せられます」

中の君は言つて微笑を見せた。

「ねえ、どうしたのですか、ねえ、なんとという幼稚なことをあなたは言いだすのですか。けれどもあなたはほんとうは私へ隔てを持つていないから、心に浮かんだだけのことでもすぐ言つてみるのですね。だから安心だ。どんなにじょうずな言い方をしようとも私が別な妻を一人持ったことは事実なのだから私も隠そうとはしない。けれど私を恨むのはあまりにも世間というものを知らないからですよ。可憐だが困つたことだ。まああなたが私の身になつて考えてごらんさい。自身を自身の心のままにできないように私はなつてい

のですよ。もし光明の世が私の前に開けてくればだれよりもあなたを愛していた証明をし

てみせることが一つあるのです。これは軽々しく口にすべきことではないから、ただ命が長くさえあればと思つていてください」

などと言つておいでになるうちに宮が六条院へお出しになつた使いが、先方で勧められた酒に少し酔い過ぎて、しんしゃく斟酌すべきことも忘れ、平気でこの西の対の前の庭へ出て来た。美しい纏頭てんとうの衣類を肩に掛けていたので後朝ごちようの使いであることを人々は知つた。いつの間にお手紙は書かれたのであろうと想像するのも快いことではないはずである。宮もしいてお隠しになろうと思召さないのであるが、涙ぐんでいる人の心苦しさに、少し気をきかせばよいものと、ややにがにがしく使いのことをお思いになつたが、もう皆暴露してしまつたのであるからとお思いになり、女房に命じて返事の手紙をお受け取らせになつた。できるならば朗らかにしていま一人の妻のあることを認めさせてしまおうと思召して、手紙をおあけになると、それは継母まははの宮のお手になつたものらしかったから、少し安心をあそばして、そのままそこへお置きになつた。他の人の書いたものにもせよ、宮としてはお気のひけることであつたに違いない。

私などが出すぎたお返事をいたしますことは、失礼だと思ひまして、書きまますことを勧めめるのですが、悩ましそうにばかりいたしておりますから、

をみなへし萎れぞ見ゆる朝露のいかに置きける名残なるらん

貴女きじよらしく美しく書かれてあつた。

「恨みがましいことを言われるのも迷惑だ。ほんとうは私はまだ当分気楽にあなたとだけ暮らして行きたかつたのだけれど」

などと宮は言つておいでになつたが、一夫一婦であるのを原則とし正当とも見られてい
る普通の人の間にあつては、良人おととが新しい結婚をした場合に、その前からの妻をだれも憐
むことになつてゐるが、高い貴族をその道徳で縛ろうとはだれもしない。いずれはそうな
るべきであつたのである。宮たちと申し上げる中でも、輝く未来を約されておいでになる
ような兵部卿ひょうぶきょうの宮であつたから、幾人でも妻はお持ちになつていいのであると世間は
見ているから、格別二条の院の夫人が気の毒であるとも思わぬらしい。こんなふうふうに夫人
としての待遇を受けて、深く愛されている中の君を幸福な人であるときえ言つてゐるので
ある。

中の君自身もあまりに水も洩もらさぬ夫婦生活に慣らされてきて、にわかにわかに軽く扱われる

ことが歎かわしいのであろうと見えた。こんなに二人と一人というような関係になった場合は、どうして女はそんなに苦悶くもんをするのであろうと昔の小説を読んでも思い、他人のこどもでも腑ふに落ちぬ気がしたのであるが、わが身の上になれば心の痛いものである、苦しいものであると、今になって中の君は知るようになった。宮は前よりもいつそう親しい良人ぶりをお見せになって、

「何も食べぬということとは非常によろしくない」

などとお言いになり、良製の菓子をお取り寄せになりまた特に命じて調製をさせたりもあそばして夫人へお勧めになるのであったが、中の君の指はそれに触れることのないのを御覧になって、

「困ったことだね」

と宮は歎息をしておいでになったが、日暮れになったので寢殿のほうへおいでになった。涼しい風が吹き立って、空の趣のおもしろい夕べである。はなやかな趣味を持つておいでになったから、こんな場合にはまして美しく御風ふう采さいをお作りになり出てお行きになる宮を知っていて、物哀れな夫人の心には忍び余る愁うれいの生じるのも無理でない。蝸ひぐらしの声を聞いても宇治の山陰の家ばかりが恋しくて、

おほかたに聞かましものを鯛の声うらめしき秋の暮れかな

と独言ひとりごとたれた。今夜はそう更ふかさずに宮はお出かけになった。前駆の人払いの声の遠くなるとともに涙は海人あまも釣り糸を垂たれんばかりに流れるのを、われながらあさましいことであると思いつつ中の君は寝ていた。結婚の初めから連続的に物思いをばかりおさせになった宮であると、その時、あの時を思うと、しまいにはうとましくさえ思われた。身体からだの苦しい原因をなしている妊娠も無事に産が済まされるかどうかわからない、短命な一族なのであるから、その場合に死ぬのかもしれないなど思っていていくと、命は惜しく思われぬが、また悲しいことであるとも中の君は思った。またそうした場合に死ぬのは罪の深いことなのであるからなどと眠れぬままに思い明かした。

次の日は中宮ちゆうぐうが御病氣におなりになったというので、皆御所へまいったのであるが、少しの御風氣ごふうぎで御心配申し上げることもないとわかった左大臣は、昼のうちに退出した。源中納言を誘って同車して自邸へ向かったのである。この日が三日の露見ろけんの式の行なわれる夜になっていた。どんなにしても華麗に大臣は式を行なおうとしているのであろうが、

こんな時のことは来賓に限りがあつて、派手はでにしようもなからうと思われた。薫かおるをそうした席へ連ならせるのはあまりに高貴なふうがあつて心恥はづかしく大臣には思われるのであるが、婿君と親密な交情を持つ人は自分の息子むすこたちにもないのであつたし、また一家の人として他へ見せるのに誇りも感じられる薫であつたから伴つて行つたらしい。平生にも似ず兄とともに忙しい気持ちで六条院へはいつて、六の君を他人の妻にさせたことを残念に思うふうもなく、何かと式の用を兄のために手つだつてくれるのを、大臣は少し物足らぬことに思いもした。

八時少し過ぐるころに宮はおいでになつた。寢殿の南の間の東に寄せて婿君のお席ができていた。高脚たかあしの膳ぜんが八つ、それに載せた皿は皆きれいで、ほかにまた小さい膳が二つ、飾り脚のついた台に載せたお料理の皿など、見る目にも美しく並べられて、儀式ぎしきの餅もちも供えられてある。こんなありふれたことを書いておくのがはばかられる。

大臣が新夫婦の居間のほうへ行つて、もう夜がふけてしまつたからと女房に言い、宮の御出座を促すのであつたが、宮は六の君からお離れになりがたいふうで渋つておいでになつた。今夜の来賓としては雲井くもいの雁夫人かりの兄弟である左衛門督さえもんのかみ、藤宰相とうさいししょうなどだけが外から来ていた。やつとしてから出ておいでになつた宮のお姿は美しくごりつばであつた。

主人がたの頭中將が盃を御前へ奉り、膳部を進めた。宮は次々に差し上げる盃を二つ三つお重ねになった。薫が御前のお世話をして御酒をお勧めしている時に、宮は少し微笑をお洩らしになった。

以前にこの縁組みの話をあそばして、堅苦しく儀礼ばることの好きな家の娘の婿になることなどは自分に不似合いなことではいやであると薫へお言いになったのを思い出しておいでになるのであろう。中納言のほうでは何も覚えていぬふうで、あくまで慇懃にしていた。そしてまたこの人は東の対の座敷のほうに設けたお供の役人たちの酒席へまで顔を出して接待をした。はなやかな殿上役人も多かつた四位の六人へは女の装束に細長、十人の五位へは三重襲の唐衣、裳の腰の模様も四位のとは等差があるもの、六位四人は綾の細長、袴などが出された纏頭であつた。この場合の贈り物なども法令に定められていてそれを越えたことはできないのであつたから、品質や加工を精選してそろえてあつた。召次侍、舎人などにもまた過分なものが与えられたのである。こうした派手な式事は目にもまばゆいものであるから、小説などにもまず書かれるのはそれであるが、自分に語つた人はいちいち数えておくことができなかつたさうであつた。

源中納言の従者の中に、あまり重用されない男かもしれぬが、暗い紛れに庭の中へ

はいつて、それらの行なわれるのを見て来て、歎息たんそくを洩もらし、

「うちの殿様はなせいぎごきをお言いにならないでこちらの殿様の婿におなりにならなかつたらう、つまらぬ御独身生活だ」

と中門の所でつぶやいているのが耳にはいつて中納言はおかしく思った。自身たちは夜ふけまで待たされていて、ただつまらぬ眠さを覚えさせられているだけであるのと、婿君の従者が美酒に酔わされて快くどこかの座敷で身を横たえているらしく思われるのを比較してみたらやましかつたのであらう。

薫は家に入り寢室で横になりながら、新しい婿として式に臨むことはきまりの悪そうなことである、たいそうな恰好かつこうをした舅しゅうとが席に出ていて、平生からなじみのある仲にもかかわらず燭ひをあかあかともして勧める盃などを宮は落ち着いて受けておいでになったのはごりつばなものであつたなどと思ひ出していた。それは実際自分でもすぐれた娘というよなものを持つていれば、この宮以外には御所へでもお上げする気にはなれなかつたであらうと思われた薫は、どこの家でも匂にお宮みやへ奉らうとして志を得なかつた人はまだ源中納言という同じほどな候補者があると、何にも自分が宮にお並べして言われるのは世間の受けが決して悪くない自分とせねばならないなどと思ひ上がりもされた。内親王を賜わる

という帝の思おぼしめ召しなるものが真実であれば、こんなふう^にに気の進まぬ自分はどうすればいいのであろう、名誉なことにもせよ、自分としてありがたく思われたい、女二によにの宮みやが死んだ恋人によく似ておいでになったならその時はうれいであらうがとさすがに否定をしきつているのでもない中納言であつた。例のような目のさめがちな独ひとり寝のつれづれさを思つて按察使あぜちの君と言つて、他の愛人よりはやや深い愛を感じている女房へやの部屋へ行つてその夜は明かした。朝になりきればとて人が奇怪がることでもないのであるが、そんなことも気にするらしく急いで起きた薫を、女は恨めしく思つたに違いない。

うち渡し世に許しなき関川をみなれそめけん名こそ惜しけれ

と按察使は言つた。哀れに思われて、

深からず上は見ゆれど関川のしもの通ひは絶ゆるものかは

薫はこう言つた。恋の心は深いと言われてさえ頼みにならぬものであるのに、上は浅い

と認めて言われるのに女は苦痛を覚えなかつたはずはない。妻戸を薫はあけて、

「この夜明けの空のよさを思つて早く出て見たかつたのだ。こんな深い趣を味わおうとしない人の気が知れないね、風流がる男ではないが、夜長を苦しんで明かしたのちの秋の黎明は、この世から未来の世のことまでが思われて身にしむものだ」

こんなことを紛らして言いながら薫は出て行つた。女を喜ばそうとして上手なことを多く言わないのであるが、艶な高雅な風采を備えた人であるために、冷酷であるなどはどの相手も思つていないのであつた。仮なように作られた初めの關係を、そのままにしておく、せめて近くにおいて顔だけでも見ることができればというような考えを持つのか、尼になつておいでになる所にもかかわらず、縁故を捜してこの宮へ女房勤めに出ている人々はそれぞれ身にしむ思いをするものらしく見えた。

兵部卿の宮は式のあつたのちの日に新夫人を昼間御覧になることによつて、いつそう深い愛をお覚えになつた。中くらいな背丈で、全体から受ける感じが清らかな人である。頬にかかつた髪、頭つきはその中でも目だつて美しい。皮膚があまりにも白いにおわしい色をした誇らかな気高い顔の眸つきはきわめて貴女らしくて、何の欠点もない美人というほかはない。二十一、二であつた。少女ではないから完成されぬところもなくして妍麗なる

盛りの花と見えた。大事に育てられてきた価値は十分に受けとれた。親の愛でこれを見れば、目もくらむ美女と思われるに違いない。ただ柔らかで愛嬌あいきょうがあつて、可憐かれんな点はこの君のよさがお思われになる宮であつた。話をされた時にする返辞へんじも羞はじらつてはいらなかつた。またたよりない氣を覚えさせもしない。確かな価値の備わつた才女らしい姫君であつた。きれいな若い女房が三十人ほど、童女六人が姫君付きで、そうした人の服装なども、きらきらしいものは飽くほど見ておいでになる兵部卿ひょうぶきょうの宮だと思ひ、不思議なほど目だたぬふうに作らせてあつた。三条の夫人が生んだ長女を東宮へ奉つた時よりも今度の婿迎えを大事に夕霧の大臣は準備したというのも、宮の御声望の高さがさせたことであろう。それからのちの宮は二条の院へ氣安くおいでになることもおできにならなかつた。軽い御身分でなかつたから、昼間をそちらへ行つておいでになるということもむずかしくて、六条院の中の南の御殿に以前ずつとおいでになつたようにしてお住みになり、日が暮れると東御殿を余所よそにしてお出かけになることもおできになれなかつたりして、宮が幾日もおいでにならぬことのあるため、こうなることであろうとは思つたが、すぐにも露骨に冷淡なお扱いを受けることになつたではないか、賢い人であれば自分の無価値さをよく知つて京へまでは出て来なかつたはずであつたと、今になつては返す返す宇治を離れて来たこと

が正気をもつてしたこととは思えなくて悲しい中の君は、やはりどうともして宇治へ行くことにしたい、ここを捨てて行くふうではなくて、あちらでしばらくでも心を休めたい、反抗的に行なえば人聞きも悪いであろうが、それならばいいはずである、とこの煩悶はんもんを一人で背負いきれぬように思い、恥ずかしくは思ったが源中納言に手紙を送った。

父君の仏事の日のことは阿闍梨あじやりから報告がございましてくわしく知ることができました。

あなたのように昔の名残なごりを思ってくださいます方がありませんでしたなら、どんなに故人はみじめであったかと思われますにつけても御親切がうれしくばかり思われます。なおこのお礼はお目にかかれます時に自身で申し上げたいと思ひます。

という文ふみであつた。檀紙の上の字も見栄みえをかまわずまじめな書きぶりがしてあるのであつるが、それもまた美しく思われた。八の宮の御忌日に僧を集めて法事を宇治で薫が行なつてくれたのに対する礼状なのであつて、おおげさに謝意は述べてないが好意は深く認めてゐるらしく思われた。平生はこちらから送る手紙の返事さえ気を置くふうに短くより書いて来ない人が、自身でまた口ずからお礼を申し上げたいと思うというようなことの書かれであることのうれしさに薫の心はときめいた。宮がお得になつたはなやかな生活に心が多くお引かれになつて、二条の院へはよくもおいでにならないことについてのの中の君の煩はんもん

悶もんも見えるのが哀れで、恋愛的なものではない手紙であるが、手から放たず何度となく薫かおるは繰り返して読んでいた。返事は、

承りました。先日は僧のようなことを多く申して、昔のことばかりを歎いた私でしたが、それは追想にとらわれざるをえない時節だったからです。名残とお書きになりましたこととで、私が故人の宮様にお持ちする感情を少し浅く御覧になっていらっしやるのではないかと恨めしくなります。

何も皆近く参上してお話しいたしましょう。

と、きまじめな文章が、白い厚い色紙に書いて送られた。

薫かおるは翌日の夕方に二条の院の中の君を訪たずねた。中の君を恋しく思う心の添った人であるから、わけもなく服装などが気になり、柔らかな衣服に、備わるが上の薫くんこう香をたきしめて来たのであったから、あまりにも高いにおいがあたりに散り、常に使っている丁ちようじ字染めの扇が知らず知らず立てる香などさえ美しい感じを覚えさせた。中の君も昔のあの夜のことか思い出されることもないのではなかったから、父宮と姉君への愛の深さが認識されるにつけても、運命が姉の意志のままになつていたのであつたらと心の動揺を覚えたかもしれない。少女ではないのであるから、恨めしい方の心と比べてみて、何につけてもりつ

ばな薫がわかつたのか、平生あまりに遠々しくもてなしていて気の毒であった、人情にうとい女だとこの人が思うかもしれぬと思ひ、今日は前の室の御簾みすの中へ入れて、自身は中央の室の御簾に几帳きちょうを添え、少し後ろへ身を引いた形で対談をしようとした。

「お招きくだすつたものではありませんが、来てもよろしいとのお許しが珍しくいただけましたお礼に、すぐにもまいりたかつたのですが、宮様が来ておいでになると承つたものですから、御都合がお悪いかもしれぬと御遠慮を申して今日にいたしました。これは長い間の私の誠意がようやく認められてまいつたのでしょうか。遠さの少し減つた御簾の中へお席をいただくことにもなりました。珍しいですね」

と薫の言うのを聞いて、中の君はさすがにまた恥ずかしくなり、言葉が出ないように思うのであつたが、

「この間の御親切なお計らいを聞きまして、感激いたしました心を、いつものようによく申し上げもいたしませんでは、どんなに私がありがたく存じておりますかしれませんような気持ちの一端をさえおわかりになりますまいと残念だったものですから」

と差はじらいながらできるだけ言葉を省いて言うのが絶え絶えほのかに薫へ聞こえた。

「たいへん遠いではありませんか。細かなお話もし、あなたからも承りたい昔のお話もあ

るのですから」

こう言われて中の君は道理に思い、少し身じろぎをして几帳のほうへ寄って来たかすかな音にさえ、衝動を感じる薫であつたが、さりげなくいつそう冷静な様子を作りながら、宮の御誠意が案外浅いものであつたとお譏りそしするようにも言い、また中の君を慰めるような話をも静々としていた。中の君としては宮をお恨めしく思う心などは表へ出してよいことではないのであるから、ただ人生を悲しく恨めしく思つていふというふうに分らして、言葉少なに憂鬱ゆううつなこのごろの心持ちを語り、宇治の山莊へ仮に移ることを薫の手で世話してほしいと頼む心らしく、その希望を告げていた。

「その問題だけは私の一存でお受け合はうすることができかねます。宮様へ素直すなおにお頼みになりまして、あの方の御意見に従われるのがいいと思ひますがね、そうでなくば御感情を害することになって、軽率だとお怒りになつたりしましては将来のためにもよくありません。それでなく穏やかに御同意をなされればあちらへのお送り迎えを私の手でどんなにでも都合よく計らいますのにはばかりがあるものですか。夫人をお託しになつても危険のない私であることは宮様がよくご存じです」

こんなことを言いながらも、話の中に自分は過去にしそこねた結婚について後悔する念

に支配ばかりされていて、もう一度昔を今にする工夫はないかということに常に思うとほめかして次第に暗くなつていくころまで帰ろうとしない客に中の君は迷惑を覚えて、

「それではまた、私は身体からだの調子もごく悪いのでございますから、こんなふうでない時がございましたら、お話をよく伺わせていただきます」

と言ひ、引つ込んで行つてしまひそうになつたのが残念に思われて、薫は、

「それにしてもいつごろ宇治へおいでになろうとお思ひになるのですか。伸びてひどくなつていました庭の草なども少しきれいにさせておきたいと思ひます」

と、機嫌きげんを取るために言ふと、しばらく身を後ろへずらしていた中の君がまた、

「もう今月はすぐ終わるでしょうから、来月の初めでもと思ひます。それは忍んですればいいでしょう。皆の同意を得たりしますようなことにはいたしませんでも」

と答えた。その声が非常に可憐かれんであつて、平生以上にも大姫君と似たこの人が薫の心に恋しくなり、次の言葉も口から出さずよりかかつていた柱の御簾の下から、静かに手を伸ばして夫人の袖そでをつかんだ。中の君はこんなことの起こりそうな予感がさつきから自分にあつて恐れていたのであると思ふと、とがめる言葉も出すことができず、いつそう奥のほうへいざつて行こうとした時、持った袖について、親しい男女の間のように、薫は御簾から

半身を内に入れて中の君に寄り添って横になった。

「私が間違っていますか、忍んでするのがいいとお言いになったのをうれいことと取りましたのは聞きそこねだったのでしょうかと、それをもう一度お聞きしようと思っただけです。他人らしくお取り扱いにならないでもよいはずですが、無情なふうをなさるではありませんか」

こう薫に恨まれても夫人は返辞をする気にもならないで、思わず憎みの心の起こるのをしいておさえながら、

「なんとというお心でしょう、こんな方とは想像もできませんようなことをなさいます。人がどう思うでしょう、あさましい」

とたしなめて、泣かんばかりになつているのにも少し道理はあるとかわいそうに思われる薫が、

「これくらいのごことは道徳に触れたことでも何でもありませんよ。これほどにしてお話をした昔を思い出してください。亡なくなられた女によおう王さんのお許しもあつた私が、近づいたからといって、奇怪なことのように見ていらつしやるのが恨めしい。好色漢がするような無礼な心を持つ私でないと安心していらつしやい」

と言ひ、激情は見せずゆるやかなふうにして、もう幾月か後悔の日ばかりが続き、苦し
 いまでになつていく恋の悩みを、初めからこまごまと述べ続け、反省して去ろうとする様
 子も見せないため、中の君はどうしてよいかもわからず、悲しいという言葉では全部が現
 わせないほど悲しんでいた。知らない他人よりもかえつて恥ずかしく、いとわしくて、泣
 き出したのを見て、薫は、

「どうしたのですか、あなたは、少女らしい」

こう非難をしながらも、非常に可憐かれんでいたいたいふうのこの人に、自身を衛まもる隙すきのな
 いところと、豊かな貴女きじよらしきがあつて、あの昔見た夜よりもはるかに完成された美の覺
 えられることによつて、自身のしたことであるが、これを他の人妻にさせ、苦しい煩悶はんもん
 をすることとなつたとくやくしくなり、薫もまた泣かれるのであつた。夫人のそばには二人
 ほどの女房が侍していたのであるが、知らぬ男の闖ちんにゆう入いしたのであれば、なんというこ
 とをとも言つて中の君を助けに出るのであるが、この中納言のように親しい間柄の人が
 この振舞ふるまいをしたのであるから、何か訳のあることであろうと思ふ心から、近くにいろこ
 とをはばかり、素知らぬ顔を作り、あちらへ行つてしまったのは夫人のために気の毒な
 ことである。中納言は昔の後悔が立ちのぼる情炎ともなつて、おさえがたいのであつたで

あろうが、夫人の処女時代にさえ、どの男性もするような強制的な結合は遂げようとしなかった人であるから、ほしいままな行為はしなかった。こうしたことを細述することはむずかしいと見えて筆者へ話した人はよくも言ってくれなかった。

どんな時を費やしても効かひのないことであつて、そして人目に怪しまれるに違いないことであると思つた薫は歸つて行くのであつた。まだ宵よひのような気でいたのに、もう夜明けに近くなつていた。こんな時刻では見とがめる人があるかもしれないと心配がされたというのも中の君の名誉を重んじてのことであつた。妊娠のために身体の調子を悪くしているという噂うわさも事実であつた。恥かたじけなくずかしいことに思い、見られまいとしていた上着の腰の上の腹帯うぶおびにいたましさを多く覚えて一つはあれ以上の行為に出なかつたのである、例のことではあるが臆おくびよう病びょうなのは自分の心であると思われる薫であつたが、思いやりのないことをするのは自分の本意でない、一時の衝動にまかせてなすべからぬことをしてしまつては今後の心が静かでありえようはずもなく、人目を忍んで通つて行くのも苦勞の多いことであろうし、宮のことと、その新しいこととでもこもごもにあの人が煩悶ぼんもんをするであろうことが想像できるではないかなどとまた賢い反省はしてみても、それでおさえきれぬ恋の火ではなく、別れて出て来てすでもう逢いたく恋しい心はどうしようもなかつた。どうしてもこ

の恋を成立させないでは生きておられないようにさえ思うのも、返す返すあやくな薰の心というべきである。昔より少し瘦せて、気高く可憐であった中の君の面影が身に添ったままでいる気がして、ほかのことは少しも考えられない薰になっていた。宇治へ非常に行きたがっているようであったが、宮がお許しになるはずもない、そうかといって忍んでそれを行なわせることはあの人のためにも、自分のためにも世の非難を多く受けることになつてよろしくない。どんなふうな計らいをすれば、世間体のよく、また自分の恋の遂げられることにもなるであろうと、そればかりを思つて虚になつた心で、物思わしそうに薰は家に寝ていた。

まだ明けきらぬころに中の君の所へ薰の手紙が届いた。例のように外見はきまじめに大きく封じた立文たてぶみであつた。

いたづらに分けつる路みちの露しげみ昔おぼゆる秋の空かな

冷やかなおもてなしについて「ことわり知らぬつらさ」（身を知れば恨みぬものをなぞもかくことわり知らぬつらさなるらん）ばかりが申しようもなくつものなのです。

こんな内容である。返事を出さないのもいぶかしいことに人が見るであろうからと、それもつらく思われて、

承りました。非常に身体からだの苦しい日ですから、お返事は差し上げられませぬ。

と中の君は書いた。

これをあまりに短い手紙であると、物足らず寂しく思い、美しかった面影ばかりが恋しく思い出された。人妻になつたせいか、むやみに恐怖するふうは見せず、貴女らしい気品も多くなつた姿で、闖入者を柔らかなになつかしいふうふうに説いて退却させた才気などが思い出されるとともに、ねたましくも、悲しくもいろいろにその人のことばかりが思われるかわる薫は、自身ながらわびしく思った。落胆はする必要もない、宮の愛が薄くなつてしまえば、あの人は自分ばかりをたよりにするはずである、しかし公然とは夫婦になれず、世間のはばかりれる二人であろうが、隠れた恋人としておいても、自分は他に愛する婦人を作るまい、生しょうがい涯がいで唯一の妻とあの人を自分だけは思つていけるであらうなどと、二条の院の夫人のことばかりを思つているというののもけしからぬ心である。反省している時、またその人に清い恋として告白している時には賢い人になつているのであるが、この人すら情けない愛欲から離れられないのは男性の悲哀である。大姫君の死は取り返しのならぬもので

あつたが、その時には今ほど薫は心を乱していなかった。これは道義観さえ超こえていろいろな未来の夢さえ描くものを心に持つていた。

この日は二条の院へ宮がおいでになつたといふことを聞いて、中の君の保護者をもつて任ずる心はなくして、胸が嫉妬しつとにとどろき、宮をおうらやましくばかり薫は思つた。

宮は二、三日も六条院にばかりおいでになつたのを、御自身の心ながらも恨めしく思おぼし召めされてにわかにお帰りになつたのである。もうこの運命は柔順に従うほかはない、恨んでいるとは宮にお見せすまい、宇治へ行こうとしても信賴する人にうとましい心ができているのであるからと中の君は思い、いよいよ右も左も頼むことのできない身になつていゝると思われ、どうしても自分は薄命な女なのであるとして、生きていゝるうちはあるがままの境遇を認めておおようにしていようと、こう決心をしたのであつたから、可憐かれんに素直にして、嫉妬しつとも知らぬふうを見せていたから、宮はいつそう深い愛をお覚えになり、思いやりをうれしくお感じになつて、おいでにならぬ間も忘れていたのではないといふことなどに言葉を尽くして夫人を慰めておいでになつた。腹部も少し高くなり、恥ひずかしがつていゝる腹帯の衣服の上に結ばれてあるのにさえ心がお惹ひかれになつた。まだ妊娠した人を直接お知りにならぬ方であつたから、珍しくさえお思いになつた。何事もきれいに整とい過ぎた

新居においでになったあとで、ここにおいでになるのはすべての点で気安く、なつかしくお思われになるままに、こまやかな将来の日の誓いを繰り返し仰せになるのを聞いていても中の君は、男は皆口が上手じょうずで、あの無理な恋を告白した人も上手に話をしたと薫のことを思い出して、今までも情けの深い人であるとは常に思っていたが、ああしたよこしまな恋に自分は好意を持つべくもないと思うことよって、宮の未来のお誓いのほうは、そのとおりであるまいと思いつながら少し信じる心も起こった。それにしてもああまで油断をさせて自分の室の中へあの人がいって来た時の驚かされようはどうだったであろう、姉君の意志を尊重して夫婦の結合は遂げなかったと話していた心持ちは、珍しい誠意の人と思われるのであるが、あの行為を思えば自分として気の許される人ではないと、中の君はいよいよ男の危険性に用心を感じるにつけても、宮がながく途絶えておいでにならぬことになれば恐ろしいと思われ、言葉には出さないのであるが、以前よりも少し宮へ甘えた心になっていたために、宮はなお可憐に思召され、心を惹かれておいでになったが、深く夫人にしみついて中納言のにおいは、薫くんこう香をたきしめたのには似ていず特異な香であるのを、においというものをよく研究しておいでになる宮であったから、それとお気づきになって、奇怪なこととして、何事かあったのかと夫人を糺ただそうとされる。宮の疑って

おいでになることと事実とはそうかけ離れたものでもなかったから、何ともお答えがしにくくて、苦しそうに沈黙しているのを御覧になる宮は、自分の想像することはありうべきことだ、よも無関心ではおられまいと始終自分は思っていたのであるとお胸が騒いだ。薫のにおいは中の君が下の単衣ひとえなども昨夜のとは脱ぎ替えていたのであるが、その注意にもかかわらず全身に沁しんでいたのである。

「あなたの苦しんでいるところを見ると、進むところへまで進んだことだろう」

とお言いになり、追究されることで夫人は情けなく、身の置き所もない気がした。

「私の愛はどんなに深いかしれないのに、私が二人の妻を持つようになったからといって、自分も同じように自由に人を愛しようというようなことは身分のない者のすることですよ。そんなに私が長く帰って来ませんでしたか、それでもないではありませんか。私の信じていたよりも愛情の淡うすいあなただった」

などとお責めになるのである。愛する心からこうも思われるのであるというふうにお訊ききになつても、ものを言わずにいる中の君に嫉妬しつとをあそばして、

またびとになれける袖そでの移り香をわが身にしめて恨みつるかな

とお言いになった。夫人は身に覚えのない罪をきせておいでになる宮に弁明もする気にならずに、

「あなたの誤解していらつしやることについて何と申し上げていいかわかりません。

見なれぬる中の衣と頼みしをかばかりにてやかけ離れなん」

と言つて泣いていた。その様子の限りなく可憐かれんであるのを宮は御覧になつても、こんな魅力が中納言を惹ひきつけたのであろうとお思いになり、いつそうねたましくおなりになり、御自身もほろほろと涙をおこぼしになつたというのは女性的なことである。どんな過失が仮にあつたとしても、この人をうとんじてしまうことはできないふうな、美しいいたいたしい中の君の姿に、恨みをばかり言つておいでになることができずに、宮は歎いている人の機嫌きげんを直させるために言い慰めもしておいでになった。

翌朝もゆるりと寝ておいでになつて、お起きになつてからは手水ちようずも朝の粥かゆもこちらでお済ませになつた。座敷の装飾も六条院の新婦の居間の輝くばかり朝鮮、支那しなの錦にしきで装飾

をし尽くしてある目移しには、なごやかな普通の家の居ごちよきをお覚えになって、女房の中には着疲れさせた服装のも混じっていたりして、静かに見まわされる空気が作られていた。夫人は柔らかな淡紫うすむらさきなどの上に、撫子色なでしこの細長をゆるやかに重ねていた。何一つ整然としていぬものもないような盛りの美人の新婦に比べてごらんになっても、劣ったとお思われにならず、なつかしい美しさの覚えられるというのは宮の御愛情に相当する人というべきであろう。円まるく肥えていた人であったが、少しほっそりとなり、色はいよいよ白くて上品に美しい中の君であった。怪しい疑いを起こさせるにおいなどのおいでいなかった常の時にも、愛嬌あいきょうのある可憐な点はだれよりもすぐれていると見ておいでになった人であるから、この人を兄弟でもない男性が親しい交際をして自然に声も聞き、様子もうかがえる時もあったは、どうして無関心でいられよう、必ず結果は恋を覚えることになるであろうと、宮は御自身の好色な心から想像をあそばして、これまでから恋をささやく明らかな証あかしの見える手紙などは来ていぬかとお思いになり、夫人の居間の中の飾り棚だんなや小さい唐櫃からびつなどというものの中をそれとなくお捜しになるのであったが、そんなものはない。ただまじめなことの書かれた短い、文学的でもないようなものは、人に見せぬために別にもしてなくて、物に取り混ぜてあったのを発見あそばして、不思議である、こ

んな用事を言うものにとどまるはずはないとお疑いの起こること今日のお心が冷静にならないのも道理である。夫人が魅力を持つばかりでなく中納言の姿もまた趣味の高い女が興味を覚えるのに十分なものであるから、愛に報いぬはずはない、よい一對の男女であるから、相思の仲にもなるであろうと、こんな御想像のされるために、宮はわびしく腹だたしく、ねたましくお思いになった。不安なお気持ちが静まらぬため、その日も二条の院にとどまつておいでになることになり、六条院へはお手紙の使いを二、三度お出しになった。わずかな時間のうちにもそうも言つておやりになるお言葉が積もるのかと老いた女房などは陰口を申していた。

中納言はこんなに宮が二条の院にとどまつておいでになることを聞いても苦しみを覚えるのであつたが、自分は誤つている、愚かな情炎を燃やしてはよろしくない、そうした愛でない清い愛で助けようと決心していた人に対して、思うべからぬことを思つてはならぬとしいて思い返し、このままにしても、自分の気持ちは汲んでくれる人に違いないという自信の持てるのがうれしかった。女房たちの衣服がなつかしい程度に古びかかつていたようであつたのを思つて、母宮のお居間へ行き、

「品のよい女物で、お手もとにできているのがあるでしょうか、少し入り用なことがある

のです」

とお尋ねすると、

「例年の法事は来月ですから、その日の用意の白い生地などがあるだろうと思います。染めたものなどは平生たくさんは私の所に置いてないから、急いで作らせましょう」

宮はこうお答えになった。

「それには及びません。たいそうなことにはありませんから、できているものでけっこうです」

と薫かおるは申し上げて、裁縫係りの者の所へ尋ねにやりなどして、女の装束幾重ねと、美しい細長などをありあわせのまま使うことにして、下へ着る絹あやや綾あやなども皆添え、自身の着料にできていた紅あかい糊のり絹ぬの槌目つちめの仕上りのよい物、白い綾の服の幾重ねへ添えたく思はった袴はかまの地がなくて付け腰だけが一つあったのを、結んで加える時に、それへ、

結びける契りことなる下紐したひもをただひとすぢに恨みやはする

と歌を書いた。大輔たゆうの君という年のいった女房で、薫の親しい人の所へその贈り物は届

けられたのである。

にわかには思い立って集めた品ですから、よくそろいもせず見苦しいのですが、よいように取り合わせてお使いください。

という手紙が添えられてあつて、夫人の着料のものは、目だたせぬようにしてはあつたが箱へ納めてあつて、包みが別になつていた。大輔は中の君へこの報告はしなかつたが、今までからこうした好意の贈り物を受け馴なれていたことであつて、受け取らぬなどと返すべきでなかつたから、どうしたものかとも心配することもなく女房たちへ分け与えたので、その人々は縫いにかかつていた。若い女房で宮御夫婦のおそばへよく出る人はことにきれいにさせておこうとしたことだと思われる。下仕えの女中などの古くなつた衣服を白あわせの袷あわせに着かえさせることにしたのも目だたないことであつて感じがよかつた。

この夫人のために薰以外にだれがこうした物質の補いをする者があるう、宮は夫人を愛しておいでになつたから、すべて不自由のないようにと計らつてはおいでになるのであるが、女房の衣服のことまではお氣のおつきにならないところであつた。大事がられて御自身でそうした物のお考えになることはなかつたのであるから、貧しきはどんなに苦しいものであるともお知りにならないのは道理なことである。寒けをさえ覚えるかっこう恰好かっこうで

花の露をもてあそんでばかりこの世はいくものように思つておいでになる宮とは違い、
 愛する人のためであるから、何かにつけて物質の補助を惜しまない薫の志をまれない好意と
 してありがたく思つている人たちであるから、宮のお気のつかないことと、気のよくつく
 薫とを比較して譏るそしようなことを言う乳母めのとなどもあつた。童女の中には見苦しくなつた姿
 で混じつていたりするのも目につくことがおりおりあつたりして、夫人はそれを恥ずかし
 く思い、この住居すまいをしてかえつて苦痛の多くなつたようにも人知れず思うことがないでも
 なかつたのであるのに、そしてこのごろは世の中の評判にさえなつている華美な宮の新婚
 後のお住居すまいの様子などを思うと、宮にお付きしている役人たちもどんなにこちらを軽蔑けいべつ
 するのであろう、貧しさを笑うであらうという煩悶はんもんを中の君がしているのを、薫が思いや
 つて知つていたのであつたから、妹でもない人の所へ、よけいな出すぎたことをすると思
 われるこんなことも、侮あなどつて礼儀を失つたのではなく、目だつようにしないのは、自分に
 助けられている夫人の無力を思う人があつてはならないと思う心から、忍んでする薫であ
 つた。この贈り物があつたために、女房の身なりをととのえさせることができ、桂うちぎを織ら
 せたり、綾あやを買い入れる費用も皆与えることができた。薫も宮に劣らず大事にかしずかれ
 て育つた人で、高い自尊心も持ち、一般の世の中から超越した貴族的な人格も持つている

のであるが、宇治の八の宮の山莊へ伺うようになって以来、豊かでない家の生活の寂しさというものは想像以上のものであったと同情を覚え、その御一家だけへではなく、物質的に恵まれない人々をあまねく救うようになってたのである。哀れな動機というべきである。

薫はぜひとも中の君のために邪悪な恋は捨てて、清い同情者の地位にとどまろうとするのであるが、自身の心が思うにまかせず、常に恋しくばかり思われて苦しいために、手紙をもつて以前よりもこまごまと書き、不用意に恋の心が出たふうに見せたような消息をよく送るようになったのを、中の君はわびしいことの添つてきた運命であると歎いていた。まったく知らぬ人であったならば、狂気の沙汰さたとたしなめ、そうした心を退けるのが容易なことであろうが、昔から特別な後援者と信頼してきて、今さら仲たがいをするのはかえつて人目を引くことになろうと思ひ、さすがにまた薫の愛を憐あわれむ心だけはあるのであつても、誘惑に引かれて相手をしているもののようにとられてはならぬとはばかられて煩悶はんもんがされた。女房たちも夫人の気持ちのわかりそうな若い人らは皆新しく京へ移つた前後から来てなじみが浅く、またなじみの深い人たちといつては昔から宇治にいた老いた女房らであつたから、苦しいことも左右の者に洩もらすことができず、姉君を思い出さぬおりもなかつた。姉君さえおいでになれば中納言も自分へ恋をするようなことにはむろんならな

つたはずであると、大姫君の死が悲しく思われ、宮が二心をお持ちになり、恨めしいことも起こりそうに予想されることよりもこの中納言の恋を中の君は苦しいことに思った。

薫はおさえきれぬものを心に覚えて、例のとおりにしんみりとした夕方に二条の院の中の君を訪ねて来た。すぐに縁側へ敷き物を出させて、

「身体からだを悪くしております時で、お話を自身で伺えませんが残念でございます」

と中の君が取り次がせて来たのを聞くと、薫は恨めしさに涙さえ落ちそうになったのを人目につかぬようにしいて紛らして、

「御病気の時には、知らぬ僧でもお近くへまいるのですから、私も医師並みに御簾みすの中へお呼びいただいてもいいわけでしょう。こうした人づてのお言葉は私を失望させてしまいます」

と言い、情けなさそうにしているのを、先夜の事情を知っている女房らが、

「仰せになりますとおり、お席があまり失礼でございます」

と言い、中央の母屋もやの御簾を皆おろして、夜居の僧のはいる室へ薫を案内したのを、中の君は実際身体も苦しいのであったが、女房もこう言っているのに、あらわに拒絶するのめかえつて人を怪しがらせる結果になるかもしれぬと思ひ、物憂ものうく思いながら少しいざつ

て出て話すことにした。

ごくほのかに時々ものを言う様子に、死んだ恋人の病気の初期のころのことが思われるのもよい兆候でないと薫は非常に悲しくなり、心が真ま暗くらになり、すぐにもものが言われず、ためらいながら、話を続けた。ずっと奥のほうに中の君のいるのも恨めしくて、御簾の下から几帳きちようを少し押すような形にして、例のなれなれしげなふうを示すのが苦しく思われ、困ることに考えられて、中の君は少将の君という人をそばへ呼んで、

「私は胸が痛いからしばらくおさえて」

と言っているのを聞いて、

「胸はおさえるとなお苦しくなるものですが」

こう言つて歎たんそく息そくを洩もらしながら薫のすわり直したことにさえ、母屋もやの中の夫人は不安が感ぜられた。

「どうしてそんなに始終お苦しいのでしょうか。人に聞きますと、初めのうちは気持ちが悪くてもまた快く癒なほつている時もあると教えてくれました。あなたはそうお言いになって若々しく私を警戒なさるのでしよう」

と薫の言うのを聞いて中の君は恥はずかしくなつた。

「私は平生いつも胸が痛いのでございます。姉もそんなふうでございました。短命な人は皆こんなふうに煩うものだとか申します」

と言った。だれも千年の松の命を持つていのでないから、あるいはそんな危険が近づいているのであるかもしれぬと思うと、薫には今の言葉が身に沁しんで哀れに思われてきて、夫人がそばへ呼んだ女房の聞くのものはわかる気にはならず、きわめて悪い所だけは口にせぬものの、昔からどんなに深く愛していたかということ、中の君にだけは意味の通じるようにして言い、人には友情とより聞こえぬ上じょうず手な話し方を薫がしているために、その人は、今までからだれもが言うとおりに珍しい人情味のある人であるとそばにいて思っていた。表はおおかたあげまき総角の姫君と死別した尽きもせぬ悲しみを話題にしているのであった。

「私は少年のころから、この世から離れた身になりたい、正しく仏道へ踏み入るにはどうすればよいかと願うことはそれだけだったのですが、前生の因縁というものだったのでしようか、そう御接近したわけでもないあの方を恋しく思い始めました時から、私の信仰に傾いた心が違ってきました、またお死なせしてからはあちらこちらの女性と交渉を始めることもして、悲痛な心を慰めようとしたこともありましたが、そんなことは何の効果もあ

るものでないことが確かにわかりました。私に魅力を及ぼす人がほかにはこの世にいないことがわかりましたから、好色らしいと誤解されますのは恥ずかしいのですがそうした不良的な愛であなたをお思いしてこそ無礼きわまるものでしょうが、私の望むところは淡々たるもので、ただこれほどの隔てで時々あなたへ直接その時その気持ちをお話し申し上げて、そしてなんとかお言葉をいただくことができます程度の睦^{むつ}まじさで御交際することはだれも非難のいたしようなないことでしよう。私の変わった性情は世間一般の人が認めているのですから、どこまでもあなたは御安心しててください」

などと、恨みもし、泣きもして薫は言うのである。

「御信用しておりませんでしたなら、こんなふうに誤解もされんばかりにまであなたと近しくお話などはいたしませんでしょう。長い間、父のため、姉のために御好意をお見せくださいましたことをよく存じているものですから、普通には説明のできない間柄の保護者と御信頼申し上げて、ただ今ではこちらから何かと御無心に出したりもいたしております」

「そんなことがありましたかどうかどうだか私に覚えはないようです。そればかりのことともたいそうにおっしゃるではありませんか。今度宇治へおいでになりたいという御相談でやつと私の存在をお認めになつたようなわけではありませんか。それだけでも哀れな私は満足が

できたのですよ。誠意のある者とおわかりになってくださいましたのですから、非常にありがたい思っております」

こんなふうに通つて、薫には飽き足らぬ恨めしい心は見えるのであるが、聞いている者がいるのであつては、思うままのことを言いえようはずもない。庭のほうへ目をやつて見ると、秋の日が次第に暗くなり、虫の声だけが何にも紛れず高く立っているが、築山のほうはもう闇やみになつている。こんな時間になつても驚かずしめやかなふうで柱によりかかつて、去ろうと薫のしないのに中の君はやや当惑を感じていた。「恋しさの限りだにある世なりせば」（つらきをしひて歎かざらまし）などと低い声で薫は口ずさんでから、

「私はもうしかたもない悲しみの囚とりになつてしまつたのです。どこか閑居をする所がほしいのですが、宇治辺に寺というほどのものでなくとも一つの堂を作つて、昔の方の人型ひとがた（祓はらいをして人に代わつて川へ流すもの）か肖像を絵に描かかせたのかを置いて、そこで仏勤ひんぎんめをしようという氣に近ごろなりました」

と言つた。

「身にしむお話でございますけれど、人型とお言いになりますので『みたらし川にせし禊みそぎ』（恋せじと）というようなことが起こるのではないかという不安も覚えられます。代わり

のものは真のものでございませんからよろしくございませんから昔の人に気の毒でござい
ますね。黄金こがねを与えなければよくは描かいてくれませんような絵師があるかもしれぬと思わ
れます」

こう中の君は言う。

「そうですよ。その絵師というものは決して気に入った肖像を作ってくれないでしょうか
らね。少し前の時代にその絵から真実の花が降つてきたとかいう伝説の絵師がありますが
ね、そんな人がいてくれればね」

何を話していても死んだ人を惜しむ心があふれるように見えるのを中の君は哀れにも思
い、自身にとつて一つの煩わしきにも思われるのであったが、少し御簾みすのそばへ寄つて行
き、

「人型とお言いになりましたことで、偶然私は一つの話の思い出しました」
と言い出した。その様子に常に超こえた親しみの見えるのが薫はうれしくて、

「それはどんなお話でしょう」

こう言いながら几帳の下から中の君の手をとらえた。煩わしい気持ちに中の君はなるの
であったが、どうにかしてこの人の恋をやめさせ、安らかにまじわっていききたいと思う心

があるため、女房へも知らせぬようにさりげなくしていた。

「長い間そんな人のいますことも私の知りませんでした人が、この夏ごろ遠い国から出てまいりまして、私のここにいますことを聞いて音信たよりをよこしたのですが、他人とは思いませんもの、はじめて聞いた話を軽率けいそつにそのまま受け入れて親しむこともできぬような気になっておりましたのに、それが先日ここへ逢あいにまいりました。その人の顔が不思議なほど亡なくなりました姉に似ていましたのでね、私は愛情らしいものを覚えたのです。形見に見ようと思召すのには適當でございせんことは、女たちも姉とはまるで違つた育ち方の人のようだと言つていたことで確かでございせんが、顔や様子がどうしてあんなにも似ているのでしょうか。それほどなつながりでもございせんのに」

この中の君の言葉を薰はあるべからざる夢の話ではないかとまで思つて聞いた。

「しかるべきわけのあることであなたをお慕いになつておいでになつたのでしょうか。どうしてただ今までその話を少しもお聞かせくださらなかつたのでしょうか」

「でも古い事實は私に否定も肯定もできなかつたのでございせんからね。何のたよりになるものも持たずにさすらつてゐる者もあるだろうとおっしゃつて、気がかりなふうにお父様が時々お洩もらしになりましたことなどで思い合わされることもあるのですが、過去の不

幸だった父がまたそんなことで冷嘲れいちようされますことの添いますのも心苦しゅうございまして」

中の君のこの言葉によれば、八の宮のかりそめの恋のお相手だった人が得ておいた形見の姫君らしいと薫は悟った。大姫君に似たと言われたことに心が惹かれて、

「そのよくおわかりにならないことはそのままでもいいのですから、もう少しくわしくお話をしてくださいませんか」

と中納言は望んだが、羞恥しゆうちを覚えて中の君は細かなことを言つて聞かせなかつた。

「その人を知りたく思召すのでございまして、その辺と申すことくらいはお教え申してもいいのですが、私もくわしくは存じません。またあまり細かにお話をいたせばいやにおなりになることに違いございせんし」

「幻術師を遠い海へつかわされた話にも劣らず、あの世の人を捜し求めたい心は私にもあるのです。そうした故人の生まれ変わりの人と見ることはできなくても、現在のようないじめのない生活をしているよりはと思う心から、その方に興味が持たれます。人型として見るのに満足しようとする心から申せば山里みどりの御堂の本尊を考えないではおられません。なおもう少し確かな話を聞かせてくださいませんか」

中納言は新しい姫君へにわかに関心を持ち出して中の君を責めるのだった。

「でもお父様が子と認めてお置きになったのでもない人のことを、こんなにお話ししてしまいますのは軽率なことなのですが、神通力のある絵師がほしいとお思いになるあなたをお気の毒に思うものですから」

こう言つてから、さらに、

「長く遠い国などで育てられていましたことで、その母が不憫ふびんがりまして、私の所へいろいろと訴えて来ましたのを、冷淡に取り合わずにいることはできませんでいますうちに、ここへまいつたのです。ほのかにしか見ることができませんでしたせいですか、想像していませんたよりは見苦しくなく見えました。どういう結婚をさせようかと、それを母親は苦勞くろうにしている様子でしたが、あなたの御堂の仏様にしていただきますことはあまりに過分なことだと思いません。それほどの資格などはどうしてあるものではありません」

など夫人は言つた。それとなく自分の恋を退ける手段として中の君の考えついたことであらうと想像される点では恨めしいのであつたが、故人に似たという人にはさすがに心の惹ひかれる薫であつた。自分の恋をあるまじいこととは深く思いながらも、あらわに侮蔑ぶべつを見せぬのも中の君が自分へ同情があるからであらうと思われる点で興奮をして中納言が話

し続けているうちに夜もふけわたつたのを、夫人は人目にどう映ることかという恐れを持つて、相手の隙を見て突然奥へはいってしまったのを、返す返すも道理なことであると思いなながらも薫は、恨めしい、くちおしい気持ちで静められなくて涙までもこぼれてくる不体裁さに恥じられもして、複雑な悶えもたをしながらも、感情にまかせた乱暴な行為に出ることは、恋人のためにも自分のためにも悪いことであろうと、しいて反省をして、平生よりも多く歎息をしながら辞去した。

こんな恋しい心はどう処理すればいいのであろう、これが続いていくばかりでは苦しさに堪えられなくなるに違いない、どんなにすれば世間の非難も受けず、しかも恋のかなうことになるであろうなどと、多くの恋愛に鍛え上げてきた心でない青年の中納言であるせいも、自身のためにも中の君のためにも無理で、とうてい平和な道のありえない思いを続けてその夜は明かした。似ているとあの人が言った人をそのとおりに信じて情人の関係を結ぶようなことはできない、地方官階級の家に養われている人であれば、こちらで行なおうとすることに障害になるものもないであろうが、当人の意志でもない関係を保つのはおもしろくないことに相違ないなどと思ひ、話を聞いた時には一時的に興奮を感じたものの、冷静になつてみれば心をさほど惹く価値もないことと薫はしているのであった。

宇治の山莊を長く見ないでいるといっそうに恋しい昔と遠くなる気がして心細くなる薫は、九月の二十幾日に出かけて行つた。主人のない家は河かわ風かぜがいつそう吹き荒らして、すごい騒がしい水音ばかりが留守居をし、人影も目につくかつかぬほどにしか徘徊はいかいしてない。ここに来てこれを見た時から中納言の心は暗くなり、限りもない悲しみを覚えた。弁の尼に逢あいたいと言うと、障子口をあけ、青あお鈍色にびの几帳いじょうのすぐ向こうへ来て挨拶あいさつをした。

「失礼なのでございますが、このごろの私はまして無気味な姿になっているのでございませうから、御遠慮をいたすほうがよいと思われまして」

と言ひ、顔は現わさない。

「どんなにあなたが寂しく暮らしておいでになるだろうと思つと、そのあなただけが私の悲しみを語る唯一の相手だと思われて出て来ましたよ。年月はずんずんたつていきました、あれから」

涙を一目浮かべて薫がこう言つた時、老女はましてとめようもない泣き方をした。

「御自身のためでなく、お妹様のために深い物思ひを続けておいでになつたころは、こんな秋の空であつたと思ひ出しますと、いつでも寂しい私ではございまして、特別に秋風

は身に沁しんで辛つらうございます。實際今になりますと、大姫様の御心配あそばしましたのがごもつともなような現象が京では起こつてまいったようにここでも承りますのは悲しゅうございます」

「一時はどんなふうに見えることがあつても、時さえたてばまた旧態にもどるものであるのに、あの方が一途に悲観をして病氣まで得ておしまひになつたのは、私がよく説明をしなかつたあやまりだと、それを思うと今も悲しいのですよ。中姫君の今経験しておられるようなことは、まず普通のことと言わねばなりませんまい。決して宮の御愛情は懸念を要するような薄れ方になつていないと思われます。それよりも言つても言つても悲しいのはやはり死んだ方ですよ。死んでしまつてはもう取り返しようがない」

と言つて薰かおるは泣いた。

薰は阿闍梨あじやりを寺から呼んで、大姫君の忌日の法会ほうえに供養する経卷や仏像のことを依託した。また、

「私はこんなふう到时々ここへ来ますが、来てはただ故人の死を悲しむばかりで、靈魂の慰めになることでもない無益な歎きをせぬために、この寢殿しほを壊こぼつてお山のそばへ堂にして建てたく思うのです。同じくは速くそれに取りかからせたいと思つています」

とも言い、堂を幾つ建て、廊をどうするかということについて、それぞれ書き示しなど薫のするのを、阿闍梨は尊い考えつきであると並み並みならぬ賛意を表していた。

「昔の方が風雅な山荘として地を選定してお作りになった家を壊つこぼことは無情なことのようにもありますが、その方御自身も仏教を唯一の信仰としておられて、すべてを仏へささげたく思召してもまた御遺族のことをお思いになって、そうした御遺言はしておかれなかつたのかと解釈されます。今では兵部卿親王ひょうぶぎょうの夫人の御所有とすべき家であつてみれば、あの宮様の御財産の一つですから、このお邸やしきのまままで寺にしては不都合でしょう。私としてもかつてにそれはできない。それに地所もあまりに川へ接近していて、川のほうから見え過ぎる、ですから寢殿だけを壊こぼつて、ここへは新しい建物を代わりに作つて差し上げたい私の考えです」

と薫が言うのと、

「きわめて行き届いたお考えでけっこうです。最愛の人を亡なくしましてから、その骨を長年袋へ入れ頸くびへ掛けていた昔の人が、仏の御方便でその袋をお捨てさせになり、信仰の道へはいったという話もございます。この寢殿を御覧になるにつけましてもお心を悲しみに動かすということはむだなことです。御堂をお建てることは多くの人を新しく道に導

くよき方法でもあり、御靈魂をお慰め申すにも役だつことでもございます。急いで取りかかりましょう。陰陽おんようの博士はかせが選びます吉日に、経験のある建築師二、三人をおよこしくださいましたならば、細かなことはまた仏家の定式がありますから、それに準じて作らせることにいたしましたよう」

阿闍梨はこう言つて受け合つた。いろいろときめることをきめ、領地の預かり人たちを呼んで、御堂の建築の件について、すべて阿闍梨の命令どおりにするようにと薫は言いつけたりしているうちに短い秋の日は暮れてしまったので、山荘で一泊していくことに薫はした。

この寢殿を見ることも今度限りになるであろうと思ひ、薫はあちらこちらの間をまわつて見たが、仏像なども皆御寺のほうへ移してしまつたので、弁の尼のお勤めをするだけの仏具が置かれてある寂しい仏室ぶつむまを見て、こんな所にどんな気持ちで彼女は毎日暮らしているのであろうと薫は哀れに思つた。

「この寢殿は建て直させることにします。でき上がるまでは廊の座敷へ住んでおいでなさい。二条の院の女王にょおう様のほうへお送りすべきものは私の莊園の者と呼んで持たせておあげなさい」

などと薫はこまごまとした注意までも弁の尼にしていた。ほかの場所ではこんな老いた女などは視野の外に置いて関心を持たずにいるのであるが、弁に対しては深い同情を持つ薫は、夜も近い室へ寝させて昔の話をした。弁も聞く人のないのに安心して、藤大納言とうのことなどもこまごまと薫に聞かせた。

「もう御容体がおむずかしくなりましてから、お生まれになりました方をしきりに見たく思召す御様子のございましたのが始終私には忘れられないことだったのでございましたのに、その時から申せばずっと末の世になりまして、こうしてお目にかかることができずとも、大納言様の御在世中真心でお仕えいたしました報いが自然に現われてまいりましたのかと、うれしくも悲しくも思い知られるのでございます。長過ぎる命を持ちまして、さまさまの悲しいことにあうと申す私の宿命が恥ずかしく、情けなくなりました。二条の院の女王様から時々逢いに出て来い、それきり来ようとしなは私を愛していないのだらうなどとおっしゃってくださいるおりもございませうが、縁起の悪い姿になった私は、もう阿弥陀様あみだ以外にお逢い申したい方もございませう」

などと弁の尼は言った。大姫君の話も多く語った。親しく仕えて見聞きした話をし、いつどんな時にこうお言いになったとか、自然の風物に心の動いた時々、故人の詠よんだ歌

などを、不似合いな語り手とは見えずに、声だけは慄ふるえていたが上手じょうずに伝え、おおよう
で言葉の少ない人であったが、そうした文学的などころもあつたかと、薫はさらに故人を
なつかしく思った。宮の夫人はそれに比べて少し派手はでな性質であつて、心を許さない人に
は毅然きげんとした態度もとる型の人らしくはあるが、自分へは同情が深く、どうして自分の恋
から身はずそう、事のない友情だけで永久に親しみたいと思うところがあると薫は二人
の女王を比較して思ったりした。こんな話のついでにあの人型のことを薫は言い出してみ
た。

「京にこのごろその人はいるのでございませうかねえ。昔のことを私は人から聞いて知って
いるだけでございます。八の宮様がまだこの山荘へおいでになりませぬ以前のことで、奥
様がお亡かくれになつて近いところに中将の君と云つておりました、よい女房で、性質などもよ
い人を、宮様はかりそめなように愛人にあそばしたのを、だれも知つた者はございませぬ
でしたところ、女の子をその人が生みました時に、宮様がそんなことが起こるかもしれぬ
という懸念けねんを持つておいでになつたものですから、それ以後の御態度がすっかりと変わり
まして、絶対にお近づきになることはなかつたのでございます。それが動機でありのすさ
びというものにお懲りになりました、坊様と同じ御生活をあそばすことになつたので、中

将はお仕えていますこともきまり悪くなりまして下がったのですが、それからのちに陸奥守つのかみの家内になって任国へ行っておりまして、上京しました時に、姫君は無事に御成長なさいましたとこちらへほのめかしてまいりましたのを、宮様がお聞きになりましたので、んな音信たよりをこちらへしてくる必要はないはずだと言いつつおしまいになりましたので、中将は歎いていと申します。それがまた主人が常陸介ひたちのすけになっていっしょに東あづまへまいりましたが、それきり消息をだれも聞かなかつたのでございます。この春常陸介が上つてまいります、中将が中の君様の所へ訪ねたずてまいりましたと申すことはちよつと聞きましてございます。姫君は二十くらいになっていらつしやるのでしよう。非常に美しい方におなりになったのを拝見する悲しさなどを、まだ中将さんの若いころ小説のようにして書いたりしたこともございました」

すべてを聞いた薫は、それではほんとうのことらしい。その人を見たいという心が起こった。

「昔の姫君に少しでも似た人があれば遠い国へでも尋ねて行きたい心のある私なのだから、子として宮がお数えにならなかつたとしても結局妹さんであることは違ひのないことなのですから、私のこの心持ちをわざわざ正面から伝えるようにはなく、こう言っていたと

だけを、何かの手紙が来たついでにでも言っておいてください」

とだけ薫は頼んだ。

「お母さんは八の宮の奥様の姪めいにあたる人なのでございます。私も血の続いた人なのですが、昔は双方とも遠い国に住んでいまして、たびたび逢うようなことはなかったのですが、先日京から大輔たゆうが手紙をよこしまして、あの方がどうかして宮様のお墓へでもお行きになりたいと言つていらつしやるから、そのつもりでということでしたが、中将からは久しぶりの音信たよりというものもくれません。でございませうからそのうちこちらへお見えになるでしょう。その節にあなた様の仰せをお伝えいたしましょう」

夜が明けたので薫は帰ろうとしたが、昨夜遅れて京から届いた絹とか綿とかいうような物を御寺みでらの阿闍梨あじやりへ届けさせることにした。弁の尼にも贈った。寺の下級の僧たち、尼君の召使いなどのために布類までも用意させてきて薫は与えたのだった。心細い形の生活であるが、こうして中納言が始終補助してくれるために、気楽に質素な暮らしが弁にできるのである。

堪えがたいまでに吹き通す木枯こからしに、残る枝もなく葉を落とした紅葉もみじの、積もりに積もり、だれも踏んだ跡も見えない庭にながめ入って、帰って行く気の進まなく見える薫であ

つた。よい形をした常磐木ときわぎにまとつた蔦つたの紅葉だけがまだ残つた紅あかきであつた。こだにの蔓つるなどを少し引きちぎらせて中の君への贈り物にするらしく薫は従者に持たせた。

やどり木と思ひ出いでずば木のもとの旅寝もいかに寂しからまし

と口ずさんでいるのを聞いて、弁が、

荒れはつる朽ち木のもとを宿り木と思ひおきけるほどの悲しさ

という。あくまで老いた女らしい尼であるが、趣味を知らなくないことで悪い気持ちは中納言にしなかつた。

二条の院へ宿り木の紅葉を薫の贈つたのは、ちようど宮が来ておいでになる時であつた。「三条の宮から」

と言つて使いが何心もなく持つて来たのを、夫人はいつものとおり自分の困るようなことこのの書かれてある手紙が添そつていのではないかと気にしていたが隠ひそしうるものでもなか

つた。宮が、

「美しい蔦だね」

と意味ありげにお言いになつて、お手もとへ取り寄せて御覧になるのであつたが、手紙には、

このごろはどんな御様子でおられますか。山里へ行つてまいりまして、さらにまた峰の朝霧に悲しみを引き出される結果を見ました。そんな話はまたまいつて申し上げましょう。あちらの寝殿を御堂に直すことを阿闍梨あじやりに命じて来ました。お許しを得ましてから、他の場所へ移すことにも着手させましょう。弁の尼へあなたから御承諾になるならぬをお言いやりになつてください。

こう書かれてあつた。

「よくもしらじらしく書けた手紙だ。私がこちらにいると聞いていたのだろう」

と宮はお言いになるのであつた。少しはそうであつたかもしれない。夫人は用事だけの言われてあつたのをうれしく思つたのであるが、どこまでも疑つたものの言いようを宮があそばすのをうるさく思い、恨めしそうにしている顔が非常に美しく、この人が犯せばどんな過失も許す気になるであろうと宮は見ておいでになつた。

「返事をお書きなさい。私は見ないようにしているから」

宮はわざとほかのほうへ向いておしまいになった。そうお言いになったからと言って、書かないでは怪しまれることであろうと夫人は思い、

山里へおいでになりましたことはおうらやましいことと承りました。あちらは仰せのよ
うに御堂にいたすのがよろしいことと思っております。しかしまた私自身のために隠
れ家として必要のあることを思い、荒廃はいたさせたくない願いもあつたのですが、あ
なたのお計らいで両様の望みがかないますればありがたいことと存じます。

と返事を書いた。こんなふうの友情をかわすだけの二人であろうと思っておいでになり
ながらも、御自身のお心慣らいから秘密があるように察せられて、御不安がのけがたいの
であろう。枯れ枯れになった庭の植え込みの中の薄が何草すすきよりも高く手を出して招いてい
る形が美しく、また穂を持たないのも露を貫き玉を掛けた身をなびかせていることなどは
平凡なことであるが夕風の吹いている草原は身にしむことが多いものである。

穂にいでぬ物思ふらししのすすき招く袂たもとの露しげくして

柔らかになつたお小袖こそでの上に直衣のうしだけをお被きになり、琵琶びわを宮は弾ひいておいでになつた。黄鐘調おうじきちょうの掻かき合わせに美しい音を出しておいでになる時、夫人は好きな音楽であつたから、恨めしいふうばかりはしておられず、小さい几帳きちょうの横から脇きょうそく息によりかかつて少し姿を現あらわしているのが非常に可憐かれんに見えた。

「あきはつる野べのけしきもしの薄すすきほのめく風につけてこそ知れ

『わが身一つの』（おほかたのわが身一つのうきからになべての世をも恨みつるかな）
と云ううちに涙ぐまれてくるのも、さすがに恥はずかしく扇で紛まらしているその気分も愛すべきであると宮はお思われになるのであるが、こんな人であるからほかの男も忘れがたく思うのであろうと疑いをお持ちになるのが夫人の身に恨めしいことに相違ない。白菊がまだよく紫に色を変えないで、いろいろ繕つくろわれてあるのはことに移ろい方のおそい中はなのなかにひとへにきよくにどうしたのか一本だけきれいに紫になつてゐるのを宮はお折おらせになり「花中はなちゆう偏へん愛あい菊きく」と誦ずしておいでになつたが、
「某親王なにかしがこの花を愛しておいでになつた夕方ですよ、天人が飛んで来て琵琶びわの手を教え

たというのはね。何事もあさはかになって天人の心を動かすような音楽というものはもはや地上からなくなってしまうたのは情けない」

とお言いになり、楽器を下へ置いておしまいになったのを、中の君は残念に思い、

「人間の心だけはあさはかにもなったでしょうが、昔から伝わっておりまます音楽などはそれほどにも墮落はしておりませんでしょう」

こう言つて、自身でおぼつかなくなっている手を耳から探り出したいと願うふうが見えた。宮は、

「それでは単独で弾いているのは寂しいものだから、あなたが合わせなさい」

とお言いになって、女房に十三絃げんをお出させになって、夫人に弾かせようとあそばされるのだったが、

「昔は先生になってくださる方がございましたけれど、そんな時にもろろく私はお習い取りすることはできなかつたのですもの」

恥ずかしそうに言つて、中の君は楽器に手を触れようとしめない。

「これくらいのことにもまだあなたは隔てというものを見せるのは情けないではありませんか、このごろ通つて行く所の人は、まだ心が解けるといふほどの間柄になっていないの

に、未成品的な琴を聞かせなさいと言えば遠慮をせずに弾きますよ。女は柔らかい素直なのがよいとあの中納言も言っていましたよ。あの人へはこんなに遠慮をばかり見せないのでしょう。非常な仲よしなのだから」

などと薫かおるのことまでも言葉に出してお恨みになったため、夫人は歎息をしながら少し琴を弾いた。近ごろ使われぬ琴は緒がゆるんでいたから盤ばん涉しきちよう調てうにしてお合わせになった。夫人の掻き合わせの爪つま音おとが美しい。催馬楽さいばらの「伊勢いせの海」をお歌いになる宮のお声の品よくおきれいであるのを、そつと几帳きちやうの後ろなどへ来て聞いていた女房たちは満足した笑えみを皆見せていた。

「二人の奥様をお持ちあそばすのはお恨めしいことですが、それも世のならわしなのですからね、やはりこの奥様を幸福な方と申し上げるほかはありませんよ。こうした所の大事な奥様になってお暮らしになる方とは思うこともできませんようでしたもとの生活へ、また帰りたいようによくおつしやるのはどうしたことでしょう」

といちずになつて言う老いた女房はかえつて若い女房たちから、

「静かになさい」

と制せいされていた。

琵琶^{びわ}などをお教えになりながら三、四日二条の院に宮がどまっておいでになり、謹慎日になったからというような口実を作つて六条院へおいでにならないのを左大臣家の人々は恨めしがつてい、大臣が御所から退出した帰り路^{みち}に二条の院へ出て来た。

「たいそうなふうをして何しにおいでになったのかと言いたい」

などとお言いになり、宮は不機嫌^{ふきげん}になつておいでになつたが、客殿のほうへ行つて御面会になつた。

「何かの機会のない限りはこの院へ上がることがなくなつております私には目に見るものすべてが身に沁^しんでなりません」

とも言い、六条院のお話などをしばらくしていたあとで、大臣は宮をお誘い出して行くのであつた。子息たちその他の高級役人、殿上役人なども多く引き連れている勢力の偉大さを見て、比較にもならぬ世間的に無力な身の上を中の君は思つてめいつた気持ちになつていた。女房らはのぞきながら、

「ほんとうにおきれいな大臣様、あんなにごりつぱな御子息様たちで、皆若盛りでお美しいと申してよい方たちが、だれもお父様に及ぶ方はないじゃありませんか、なんとという美男でいらつしやるのでしよう」

と中には言う者もあつた。また、

「あんなおおぎようなふうをなすつて、わざわざお迎えなどにおいでになるなんてくちおしい。世の中つて楽なものではありませんね」

と歎息する女もあつた。夫人自身も寂しい来し方を思い出し、あのはなやかな人たちの世界のいちぐう一隅を占めることは不可能な影の淡い身の上であることがいよいよ心細く思われて、やはり自分は宇治へ隠退してしまうのが無難であろうと考えられるのであつた。

日は早くたち年も暮れた。一月の終わりから普通でない身体の苦痛を夫人は感じだしたのを、宮もまだ産をする婦人の悩みをお見になつた御経験はなかつたので、どうなるのかと御心配をあそばして、今まできしう祈祷などをほうぼうでさせておいでになつた上に、さらにはかでも修法を始めることをお命じになつた。非常に容体が危険に見えたために、中宮ちゆうぐうからもお見舞いの使いが来た。中の君が二条の院へ迎えられてから足かけ三年になるが、御良人の宮の御愛情だけはおろそかなものでないだけで、一般からはまだ直接親王夫人に相当する尊敬は払われていなかったのに、この時にはだれも皆驚いて見舞いの使いを立て、自身でも二条の院へ来た。

源中納言は宮の御心配しておいでになるのにも劣らぬ不安を覚えて、気づかわしくてな

らないのであつても、表面的な見舞いに行くほかは近づいて尋ねることもできずに、ひそかに祈祷などをさせていた。この人の婚約者の女にょに二の宮みやの裳着もぎの式が目前まへのことになり、世間はその日の盛んな儀礼の用意に騒いでいる時であつて、すべてを帝御みかど自身が責任者であるようにお世話をあそばし、これでは後援する外がいせき、威いのないほうがかえつて幸福が大きいたとも見られ、亡なき母君の藤壺ふじつぼの女御にょごが姫宮のために用意してあつた数々の調度の上に、宮中の作つくりもの物もの所ところとか、地方長官などかへ御下命になつて作製おさせになつたものが無数にでき上がつてい、その式の済んだあとで通い始めるようにとの御内意が薫へ伝達されてい、る時であつたから、婿方でも平常と違ふ緊張をしてい、るはずであるが、なおいままでどおりどにそちらのことはどうでもいいと思われ、中の君の産の重いことばかりを哀れに思つて歎息を続ける薫であつた。

二月の朔ついでち日に直物なおしものといつて、一月の除目じょくの時にし残された官吏の昇任更任の行なわれる際に、薫は権大納言ごんになり、右大將を兼任することになつた。今まで左大將を兼ねていた右大臣が軍職のほうだけを辞し、右が左に移り、右大將が親補されたのである。新任の挨拶あいさつにほうぼうをまわつた薫は、兵部卿ひょうぶきやうの宮へもまいった。夫人が悩んでいる時であつて、宮は二条の院の西の対においになつたから、こちらへ薫は来たのであつた。

僧などが来ていて儀礼を受けるには不都合な場所であるのにと宮はお驚きになり、新しいお直衣のうしに裾すその長い下襲したかさねを召してお身なりをおととのえになって、客の礼に対する答とうの拝礼を階下へ降りてあそばされたが、大将もりっぱであつたし、宮もきわめてごりっぱなお姿と見えた。この日は右近衛府うこんえふの下僚の招宴をして纏頭てんとうを出すならわしであつたから、自邸では言っていたが、近くに中の君の悩んでいる二条の院があることで少し躊躇ちゆうちよしている、夕霧の左大臣が弟のために自家で宴会をしようと言いだしたので六条院で行なつた。皇子がたも相伴の客として宴にお列つらなりになり、高級の官吏なども招きに応じて来たのが多数にあつて、新任大臣の大饗宴だいきようえんにも劣らない盛大な、少し騒がし過ぎるほどのものになつた。兵部卿の宮も出ておいでになつたのであるが、夫人のことがお気づかひしいために、まだ宴の終わらぬうちに急いで二条の院へお帰りになつたのを、左大臣家の新夫人は不満足に思い、ねたましがった。同じほどに愛されているのであるが権家の娘であることに驕おごっている心からそう思われたのであろう。

ようやくその夜明けに二条の院の夫人は男児を生んだ。宮も非常にお喜びになつた。右大将も昇任しょうじんの悦よろこびと同時にこの報を得ることのできたのをうれしく思った。昨夜の宴に出たお直衣のうしを述べに来るとともに、御男子出産の喜びを申しに、薫は家へ帰ると

すぐに二条の院へ来たのであった。

兵部卿の宮がそのままずっと二条の院におられたから、お喜びを申しに伺候しない人もなかつた。産養うぶやしなひの三日の夜は父宮のお催しで、五日には右大将から産養を奉った。屯と食んじき五十具、碁手ごての銭、碗飯わうばんなどという定まったものはその例に従い、産婦の夫人へ料理の重ね箱三十、嬰兒えいじの服を五枚重ねにしたもの、襖襟むつきなどに目だたぬ華奢かしやの尽くされてあるのも、よく見ればわかるのであった。父宮へも浅香木の折敷おしき、高坏たかつきなどに料理、ふずく（麵類めんるい）などが奉られたのである。女房たちは重詰めの料理のほか、籠入りかごの菓子三十が添えて出された。たいそうに人目を引くことはわざとしなかつたのである。七日の夜は中宮からのお産養であつたから、席つらなに列らる人が多かつた。中宮大夫だゆうを初めとして殿上役人、高級官吏は数も知れぬほどまいったのだつた。帝も出産を聞きこしめ召して、兵部卿の宮がはじめて父になつた喜びのしるしをぜひと贈るべきであると仰せになり、太刀たちを新王子に賜たまわつた。九日も左大臣からの産養があつた。愛嬢の競争者の夫人を喜ばないのであるが、宮の思召しをはばかり、当夜は子息たちを何人も送り、接客の用を果たさせもした。

夫人もこの幾月間物思いをし続けると同時に、身体の苦しさも並み並みでなく、心細く

ばかり思っていたのであったが、こうしたはなやかな空気に包まれる日が来て少し慰んだかもしれない。

右大将はこんなふう^にに動揺されぬ位置が中の君にできてしまい、王子の母君となつてしまつては、自分の恋に対して冷淡さが加わるばかりであろうし、宮の愛はこの夫人に多く傾くばかりであろうと思われのはくちおしい氣のすることであつたが、最初から願つていた中の君の幸福というものがこれで確實になつたとする点ではうれしく思わないではいられなかつた。

その月の二十幾日に女二の宮の裳着の式が行なわれ、翌夜に右大将は藤壺^{ふじつぼ}へまいった。これに儀式らしいものはなくて、ひそかなことになつていた。天下の大事のように見えるほどおかしきになつた姫宮の御良人^{おとと}に一臣下の男がなるのに不満が覚えられる。婚約はお許しになつておいても、結婚をそう急いでおさせにならないでもよいではないかと非難らしいことを申す者もあつたが、お思い立ちになつたことはすぐ実行にお移しになる帝^{みかど}の御性質から、過去に例のないまで帝の婿として薫を厚遇しようとお考えになつてあそばすことらしかつた。帝の御婿になる人は昔も今もたくさんあろうが、まだ御盛んな御在位中にただの人間のように婿取りに熱中あそばしたというようなことは少なかつたであろう。

左大臣も、

「右大将はすばらしい運命を持った男ですね。六条院すら朱雀院すざくの晩年に御出家をされる際にあの母宮をお得になつたくらいのことだし、私などはましてだれもお許しにならないのをおかしてに拾つたにすぎない」

こんなことを言つた。夫人の宮はそのとおりであつたことがお恥ずかしくて返辞をあそばすこともできなかった。

三日目の夜は、大蔵卿おおくらぎょうを初めとして、女二の宮の後見に帝のあてておいでになる人々、宮付きの役人に仰せがあつて、右大将の前駆の人たち、隨身、車役、舎人とねりにまで纏頭てんとうを賜わつた。普通の家の新郎の扱い方に少しも変わらないのであつた。それからのは忍び忍びに藤壺へ薫は通つて行つた。心の中では昔のこと、昔にゆかりのある人のことばかりが思われて、昼はひねもす物思いに暮らして、夜になるとわが意志でもなく女二の宮をお訪ねに行くのも、そうした習慣のなかつた人であるからおつくうで苦しく思われる薫は、御所から自邸すまいへ宮をお迎えしようと考えついた。そのことを尼宮はうれしく思召おほしめして、御自身のお住居すまいになつてゐる寢殿を全部新婦の宮へ譲ろうと仰せになつたのであるが、それはもつたないことであると薫は言つて、自身の念誦講堂ねんずとの間に廊を造らせていた。

西側の座敷のほうへ宮をお迎えするつもりらしい。東の対なども焼けてのちにまたみごとな建築ができていたのをさらに設備を美しくさせていた。薫のそうした用意をしていることが帝のお耳にはいい、結婚してすぐに良人おとこの家へはいるのはどんなものであろうと不安に思召されるのであった。帝も子をお愛しになる心の闇やみは同じことなのである。尼宮の所へ勅使がまいり、お手紙のあった中にも、ただ女二の宮のことばかりが書かれてあった。お亡なくなりになった朱雀院が特別にこの尼宮を御援助になるようにと遺託しておありになったために、出家をされたのちでも二品内親王にほんの御待遇はお変えにならず、宮からお願になることは皆御採用になるといふほどの御好意を帝は示しておいになったのである。こうした最高の方を舅しゅうとぎみ君とし、母宮として、たいせつにお扱われする名誉もどうしたものか薫の心には特別うれしいとは思われずに、今もともすれば物思い顔をしていて、宇治の御堂の造営を大事に考えて急がせていた。

兵部卿の宮の若君の五十日になる日を数えていて、その式用の祝いの餅もちの用意を熱心にして、竹の籠かご、檜ひのきの籠などまでも自身で考案した。沈じんの木、紫檀したん、銀、黄金などのすぐれた工匠を多く家に置いている人であったから、その人々はわれ劣らじと製作に励んでいた。薫はまた宮のおいでにならぬひまに二条の院の夫人を訪れた。思いなしか重々しさと高

貴さが添ったように中の君を薫は思った。もう薫は結婚もしたのであるから、自分の迷惑になるような気持ちは皆紛れてしまつているであろうと安心して夫人は出て来たのであったが、やはり同じように寂しい表情をし、涙ぐんでいて、

「自分の意志でない結婚をした苦痛というものはまた予想外に堪えられないものだと思われるまして、煩悶はんもんばかりが多くなりました」

と、新婦の宮に同情の欠けたようなことを薫は言つて夫人に訴えた。

「とんだことをおつしやいます。そういうことをいつの間にか人が聞くようになってはたいへんですよ」

こう中の君は言いながらも、だれが見ても光栄の人になつていて、それにも慰められずまだ故人が忘れられないように言うこの人の愛の純粹さをうれしく思つていた。姉君が生きていたらとも思うのであったが、しかしそれも自分と同じように勝ち味のない競争者を持つて薄運を歎くにとどまることになつたであろう、富のない自分らは世の中から何につけても尊重されていくものではないらしいとまた思うことによつて姉君がどこまでも情に負けず結婚はせまいとした心持ちのえらさが思われた。

薫が若君をぜひ見せてほしいと言つているのを聞いて、恥ずかしくは思いながら、この

人に隔て心を持つようには取られたくない、無理な恋を受け入れぬと恨まれる以外のこと
で、この人の感情は害したくないと中の君は思い、自身では何とも返辞をせずに、乳母めのとに
抱かせた若君を御簾みすの外へ出して見せさせた。いうまでもなく醜い子であるはずはない。

驚くほど色が白く、美しく、高い声を立てて笑えんでみせる若君を見て薫は、これが自分
の子であったなраと思ひ、うらやましい氣のしたというのは、この人の心も人間生活に離
れにくくなったのであろうか。しかしこの人は、死んだ恋人が普通に自分の妻になつてい
て、こうした人を形見に残しておいてくれたならばと思ふのであつて、自身が名譽な結婚
をしたと見られている女二の宮から早く生まれる子があればよいなどは夢にも考えない
というのはあまりにも変わった人である。こんなふうで死んで取り返しよのない人にば
かり未練を持ち、新しい妻の内親王に愛情を持たないことなどはあまり書くのがお氣の毒
である。こんな変人を帝が特にお愛しになつて、婿にまではあそばされるはずはないので
ある。公人としての才能が完全なものであつたのであろうと見ておくよりしかたがない。

これほどの幼い人をはばかり見せてくれた夫人の好意もうれしくて、平生以上にこま
やかに話をしていゝうちに日が暮れたため、他で夜の刻をふかしてはならぬ境遇になつた
ことも苦しく思ひ、薫は歎息を洩もらしながら歸つて行つた。

「なんといいよいよおいでしよう。『折りつれば袖こそにほへ梅の花』というように、鶯もかぎつけて来るかもしれないね」

などと騒いでいる女房もあった。

夏になると御所から三条の宮は方角塞がりになるために、四月の朔日の、まだ春と夏の節分の来ない間に女二の宮を薫は自邸へお迎えすることにした。

その前日に帝は藤壺へおいでになって、藤花の宴をあそばされた。南の庇の間の御簾を上げて御座の椅子が立てられてあった。これは帝のお催しで宮が御主権になったのではない。高級役人や殿上人の饗膳などは内蔵寮から供えられた。左大臣、按察使大納言、藤中納言、左兵衛督などがまいつて、皇子がたでは兵部卿の宮、常陸の宮などが侍された。南の庭の藤の花の下に殿上人の席ができてあった。後涼殿の東に楽人たちが召されてあって、日の暮れごろから双調を吹き出し、お座敷の上では姫宮のほうから御遊の樂器が出され、大臣を初めとして人々がそれを御前へ運んだ。六条院が自筆でおしたためになり、三条の尼宮へお与えになった琴の譜二巻を五葉の枝につけて左大臣は持つて出、由来を御披露して奉った。次々に十三絃、琵琶、和琴の名樂器が取り出された。朱雀院から伝わった物で薫の所有するものである。笛は柏木の太納言が夢に出て伝える人を

夕霧へ暗示した形見のもので、非常によい音ねの出るものであると六条院がお愛しになったものを、右大将へ贈るのはこの美しい機会以外にないと思ひ、薫のためにこの人が用意してきたのであるらしい。大臣に和琴、兵部卿の宮に琵琶の役を仰せつけになった。笛の右大将はこの日比類もなく妙音を吹き立てた。殿上役人の中にも唱歌の役にふさわしい人は呼び出され、おもしろい合奏の夜になった。御前へ女二によにの宮みやのほうから粉熟ふすくが奉られた。沈じんの木の折敷おしきが四つ、紫檀したんの高坏たかつき、藤色の村濃むらごの打敷うちしきには同じ花の折り枝が刺繡ぬいで出してあつた。銀の陽器ようき、瑠璃るりの杯瓶さかずき子は紺瑠璃こんるりであつた。兵衛督が御前の給仕をした。お杯を奉る時に、大臣は自分がたびたび出るのはよろしくないし、その役にしかるべき宮がたもおいでにならぬからと言ひ、右大将にこの晴れの役を譲つた。薫は遠慮をして辞退をしていたが、帝もその御希望がおりになるようであつたから、お杯をささげて「おし」という声の出し方、身のとりなしなども、御前ではだれもする役であるが比べるものもなかりりっぱさに見えるのも、今日は婿君としての思ひなしが添うからであるかもしれぬ。返しのお杯を賜わつて、階下へ下り舞踏の礼をした姿などは輝くようであつた。皇子がた、大臣などがお杯を賜わるのさえきわめて光榮なことであるのに、これはまして御婿として御みこころ待あそばす御心みこころがおりになる場合であつたから、幸福そのもののような形に見え

たが、階級は定まったことであつたから、大臣、按察使大納言あぜちの下の座しもに帰つて来て着いた時は心苦しくさえ見えた。按察使大納言は自分こそこの光榮に浴よそうとした者ではないか、うらやましいことであると心で思つていた。昔この宮の母君の女御によごに恋をしていて、その人が後宮にはいつてからも始終忘れぬ消息を送つていたのであつて、しまいにはまたお生みした姫宮を得たい心を起こすようになり、宮の御後見役代わりの御良人ごりょうじんになることを人づてにお望み申し上げたつもりであつたのが、その人はむだなことを知つて奏上もしなかつたのであつたから、按察使は残念に思い、右大将は天才に生まれて来ているとしても、現在の帝がこうした媚かしくきをあそばすべきでない、禁廷の中のお居間に近い殿舎で一臣下が新婚の夢を結び、果ては宴会とか何とか派手はでなことをあそばすなどは意を得ないなどとお譏りそし申し上げてはいたが、さすがに藤花の御宴に心が惹かれて参列して、心の中では腹をたてていた。燭を手にして歌を文台の所へ置きに来る人は皆得意顔に見えたが、こんな場合の歌は型にはまつた古くさいものが多いに違いないのであるから、わざわざ調べて書こうと筆者はしなかつた。上流の人とても佳作が成るわけではないが、しるしだけに一、二を聞いて書いておく。次のは右大将が庭へ下りて藤の花を折つて来た時に、帝へ申し上げた歌だそうである。

すべらぎのかざしに折ると藤の花及ばぬ枝に袖かけてけり

したり顔なのに少々反感が起こるではないか。

よろづ代をかけてにほはん花なれば今日けふをも飽かぬ色とこそ見れ

これは御製である。まただれかの作、

君がため折れるかざしは紫の雲に劣らぬ花のけしきか

世の常の色とも見えず雲井まで立ちのぼりける藤波の花

あとの腹をたてていた大納言の歌らしく思われる。どの歌にも筆者の聞きそこねがあつてまちがったところがあるかもしれない。だいたいこんなふうの歌で、感激させられるところの少ないものようであつた。

夜がふけるにしたがつて音楽は佳境にはいつていった。薫が「あなたふと」を歌った声
 が限りもなくよかった。按察使も昔はすぐれた声を持った人であったから、今もりつぱに
 合わせて歌った。左大臣の七男が童の姿で笙の笛を吹いたのが珍しくおもしろかったので
 帝から御衣を賜わった。大臣は階下で舞踏の礼をした。もう夜明け近くなってから帝は常
 の御殿へお帰りになった。纏頭は高級官人と皇子がたへは帝から、殿上役人と楽人たち
 へは姫宮のほうから品々に等差をつけてお出しになった。

その翌晩薫は姫宮を自邸へお迎えして行ったのであった。儀式は派手なものであった。
 女官たちはほとんど皆お送りに来た。庇の御車に宮は召され、庇のない糸毛車が三つ、
 黄金作りの檳榔毛車が六つ、ただの檳榔毛車が二十、網代車が二つお供をした。女房
 三十人、童女と下仕えが八人ずつ侍していたのであるが、また大將家からも儀装車十二に
 自邸の女房を載せて迎えに出した。お送りの高級役人、殿上人、六位の蔵人などに皆華
 奢な服装をさせておありになった。

こうしてお迎えした女二の宮を、薫は妻として心安く観察するようになったが、宮はお
 美しかった。小柄で上品に落ち着いて、どこという欠点もお持ちにならないのを知って、
 自分の宿命というものも悪くはないようであると喜んだとはいうものの、それで過去の悲

しい恋の傷がいやされたのでは少しもなかった。今もどんな時にも紛れる方もなく昔ばかりが恋しく思われる薫であつたから、自分としては生きているうちにそれに対する慰めは得られないに違いない、仏になつてはじめて、恨めしい因縁は何の報いであるということが判然することにより忘られることにもなろうと思ひ、寺の建築のことにばかり心が行くのであつた。

賀茂かもの祭りなどがあつて、世間の騒がしいころも過ぎた二十幾日に薫はまた宇治へ行つた。建造中の御堂を見て、これからすべきことを命じてから、古山莊を訪ねたすずに行くのは心残りに思われて、そのほうへ車をやっている時、女車で、あまりたいそうなのではないが一つ、荒々しい東国男の腰に武器を携えた侍がおおぜい付き、下僕の数もおおぜいで、不安のなさそうな旅の一行が橋を渡つて来るのが見えた。田舎風いなかな連中であると見ながら下りて、大将は山莊の内にはいり、前駆の者などがまだ門の所で騒がしくしている時に見ると、宇治橋を来た一行もこの山莊をさして来るものらしかった。隨身ずいじんたちががやがやというのを薫かおるは制して、だれかとあとから来る一行を尋ねさせてみると、妙ななまり声で、「前常陸ひたちのかみ守様のお嬢様が初瀬はせのお寺へお詣りまいになつての帰りです。行く時もここへお泊まりになつたのです」

と答えたのを聞いて、薫はそれであった、話に聞いた人であったと思ひ出して、従者たちは見えない所へ隠すようにして入れ、

「早くお車を入れなさい。もう一人ここへ客に来てゐる人はありますが、心安い方で隠れたお座敷のほうにおられますから」

とあとの人々へ言させた。薫の供の人々も皆狩衣姿かりぎぬなどで目にたたぬようにはしてゐるが、やはり貴族に使われている人と見えるのか、はばかりて皆馬などを後ろへ退すきらせてかしこまっていた。

車は入れて廊の西の端へ着けた。改造後の寢殿はまだできたばかりで御簾みすも皆は掛けない。格子が皆おろしてある中の二間の間の襖からかみ子の穴から薫はのぞいていた。堅い上着が音をたてるのでそれは脱いで、直衣のうしと指貫さしぬきだけの姿になっていた。車の人はすぐにもおりて来ない、弁の尼の所へ人をやって、りっぱな客の来ていられる様子であるがどなたかというようなことを聞いているらしい。薫は車の主を問わせた時から山荘の人々に、自分自分が来ているとは決して言うなと口どめをまずしておいたので皆心得ていて、

「早くお降りなさいまし。お客様はおいでになりますますが別のお座敷においでになります」と言わせた。

若い女房が一人車からおりて主人のために簾すだれを掲げていた。警固の物々しい騎士たちに比べてこの女房は物馴ものなれた都風をしていた。年の行った女房がもう一人降りて来て、

「お早く」

と言う。

「何だか晴れがましい気がして」

と言う声はほのかであったが品よく聞こえた。

「またそれをおっしゃいます。こちらはこの前もお座敷が皆しまっていたではございませんか。あすこに人が見ねばどこに見る人がございましょう」

と女房はわかつたふうなことを言う。恥ずかしそうにおりて来る人を見ると、その頭の形、全体のほっそりとした姿は薫に昔の人を思い出させるものであろうと思われた。扇をいっばいに拈ひろげて隠していて顔の見られないために薫は胸騒ぎを覚えた。車の床は高く、降りる所は低いのであったが、二人の女房はやすやすと出て来たにもかかわらず、苦しうに下をながめて長くかかつておりた人は家の中へいざり入った。紅紫の桂うちぎに撫なで子色らしい細長を着、淡うすみどり緑の小桂を着ていた。向こうの室は薫ののぞく襖からかみ子の向こうに四尺の几帳きちようは立てられてあるが、それよりも穴のほうが高い所にあるためすべてがこちら

から見えるのである。この隣室をまだ令嬢は気がかりに思うふうで、あちら向きになつて身を横たえていた。

「ほんとうにお気の毒でございました。泉河いずみがわの渡しも今日は恐ろしゆうございましたね。二月の時には水が少なかつたせいかよろしかつたのでございます」

「なあに、あなた、東国の道中を思えばこわい所などこの辺にはあるものですか」

実際女房は二人とも苦しい気もなくこんなことを言い合っているが、主人は何も言わずにひれ伏していた。袖から見える腕かひなの美しさなども常陸ひたちさんなどと言われる者の家族とは見えず貴女きしよらしい。薫は腰の痛くなるまで立ちすくんでいるのだったが、人のいるとは知らずまいとしてなおじつと動かずに見ていると、若いほうの女房が、

「まあよいにおいがしますこと、尼さんがたいていらつしやるのでしようか」と驚いてみせた。老いたほうのも、

「ほんとうにいい香ね。京の人は何といつても風流なものですね。ここほどけつこうな所はないと御主人様は思召おぼしめすふうでしたが、東国ではこんな薫香くんこうを合わせてお作りになることはできませんでしたね。尼さんはこうした簡単な暮らしをしていらつしやってもよいものを着ていらつしやいますわね、鈍色にびだつて青色だつて特別によく染まつた物を使つ

ていらつしやるではありませんか」

と言つてほめていた。向こうのほうの縁側から童女が来て、

「お湯でも召し上がりませうように」

と言ひ、折敷おしきに載せた物をいろいろ運び入れた。菓子こしを近くへ持つて来て、

「ちよつと申し上げます。こんな物を召し上がりません」

と令嬢を起こしているが、その人は聞き入れない。それで二人だけで栗くりなどをほろほろ

と音をさせて食べ始めたのも、薫には見馴なれぬことであつたから眉まゆがひそめられ、しばらく

く襖子の所を退のいて見たものの、心を惹ひくものがあつてもとの所へ来て隣すきみの隙見すきみを続けた。

こうした階級より上の若い女を、中ちゆうぐう宮みやの御殿をはじめとしてそこで顔の美しいも

の、上品なものを多く知つているはずの薫には、格別かくべつすぐれた人でなければ目にも心にも

とどまらないために、人からあまりに美の観照点くわんしやうてんが違い過ぎるとまで非難されるほどであ

つて、今目の前にいるのは何のすぐれたところもある人と見えないのであるが、おさえが

たい好奇心のわき上がるのも不思議であつた。尼君は薫のほうへも挨拶あいさつを取り次ついでがせて

よこしたのであるが、御気分が悪いとお言いになつて、しばらく休息きゅうしをしておいでになる

と、従者がしかるべく断ことわつていたので、この姫君を得たいように言つておいでになつた

のであるから、こうした機会に交際を始めようとして、夜を待つために一室にこもっているであろうと解釈して、こうしてその人が隣室をのぞいているとも知らず、いつもの薫の領地の支配者らが機嫌伺いきげんに来て重詰めや料理を届けたのを、東国の一行の従者などにも出すことにし、いろいろと上手じょうずに計らっておいてから、姿を改めて隣室へ現われて来た。先刻ほめられていたとおりに身ぎれいにしていて、顔も気品があつてよかつた。

「昨日お着きになるかとお待ちしていたのですが、どうなすつて今日もこんなにお着きがおそくなつたのでしょうか」

「こんなことを弁の尼が言くと、老いたほうの女が、

「お苦しい御様子ばかりが見えますものですから、昨日は泉河のそばで泊まることにしまして、今朝けさも御無理なように見えましたから、そこをゆるりと立つことにしたものですから」

姫君を呼び起こしたために、その時やつとその人は起きてすわつた。尼君に恥じてからだ身体をそばめている側面の顔が薫の所からよく見える。上品な眸めつき、髪の毛のぐあいが大姫君の顔も細かによくは見なかつた薫であつたが、これを見るにつけてただこのとおりであつたと思ひ出され、例のように涙がこぼれた。弁の尼が何か言うことに返辞をする声はほのか

ではあるが中の君にもまたよく似ていた。心の惹かれる人である、こんなに姉たちに似た人の存在を今まで自分は知らずにいたとは迂闊なことであった。これよりも低い身分の人であつても恋しい面影をこんなにまで備えた人であれば自分は愛を感じずにはおられない気がするのに、ましてこれは認められなかつたというだけで八の宮の御娘ではないかと思つてみると、限りもなくなつかしさうれしさがわいてきた。今すぐにも隣室へはいつて行き、「あなたは生きていたではありませんか」と言い、自身の心を慰めたい、蓬菜へ使いをやつてただ証の簪だけ得た帝は飽き足らなかつたであろう、これは同じ人ではないが、自分の悲しみでうつろになつた心をいくぶん補わせることにはなるであろうと薫が思つたというのは宿縁があつたものであろう。

尼君はしばらく話してただけであちらへ行つてしまった。女房らの不思議がついていかおりを自身も嗅いで、薫ののぞいていることを悟つたためによけいなことは何も言わなかつたものらしい。

日も暮れていったので、薫も静かに座へもどり、上着を被たりなどして、いつも尼君と話す襖子の口へその人と呼んで姫君のことなどを聞いた。

「都合よく私がここで落ち合うことになつたのですが、どうでした私が前に頼んでおいた

話は」

と薫が言うと、

「仰せを承りましてからは、よい機会があればとばかり待っていたのでございますが、そのうち年も暮れまして、今年になりましてから二月に初瀬参りの時にはじめてお逢いすることになったのでございます。お母さんにあなた様の思召しをほのめかしてみますと、大姫君とはあまりに懸隔のあるお身代わりでおそれおおいと申しておりましたが、ちょうどそのころはあなた様のほうにもお取り込みのございましたところで、お暇もないと承っておりますし、こうした問題はことにまたお避けになる必要があると存じましてその御報告をいたしますことも控えておりました。ところがまたこの月にもお詣りをなさいまして、今日もお帰りがけにお寄りになったのでございます。往復に必ずおいでになりますのもお亡くなりになりました宮様をお慕いになるお心からでございます。お母さんがさしかえがあつて今度はお一人でお越しになったものですから、あなた様が御同宿あそばさなごとは申されないのでございます」

こう弁の尼は答えた。

「見苦しい出歩きを人に知らすまいと思つて、客は私だと言うなど言つておきましたが、

どこまで命令は守られることかあてにはならない。供の者などは口が軽いものですからね。だからいいではありませんか、一人で来ていられるのはかえって気安く思われますからね、こんなに深い因縁があつて同じ所へ来合わせたと伝えてください」

と薫が言うと、

「にわかな御因縁話でございますね」と言い、

「それではそう申しましょう」

立つて行こうとする弁に、

かほ鳥の声も聞きしにかよふやと繁しげみを分けてけふぞたづぬる

口ずさみのようにして薫はこの歌を告げたのを、姫君の所へ行つて弁は話した。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日4版を使用しました。

※「あきはつる野べのけしきもしの薄《すすき》ほのめく風につけてこそ知れ」の歌の前には、底本ではカギ括弧が二つありましたが、一つにしました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2004年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

宿り木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>